
仮面の魔女と黒い銃

桂樹緑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面の魔女と黒い銃

【Nコード】

N9585U

【作者名】

桂樹緑

【あらすじ】

『感覚変換』技術を用いた、超リアル体験がウリのヴァーチャル・リアリティ・アプリケーション、『ペルソナクライシス』。そのプレイヤーである『ジェット・バレル』こと真壁陸朗は、ゲームシステムに介入し、自分を有利にする不正プレイヤー　いわゆる『チーター』だった。本意をねじ曲げ、勝敗のみに執着し、いつしか楽しむ事よりも勝つ事だけが目的となってもなお、ゲームから離れられなかった陸朗。チートを駆使して勝ちを重ねる彼の前に、ある日、一人の『本物』が現れる。『山羊角』と名乗るそのプレイヤーは、

圧倒的な力によって陸朗のジェット・バレルを叩きのめした。久方ぶりの真っ向勝負での敗北に、陸朗はしばらく忘れていた感情を思い出す。それはかつて『魔女』と呼ばれたトッププレイヤーへの憧れと、純粹なる強さの渴望だった。チートによってねじ曲げられていたその思いは、少しずつ陸朗の心の中で、大きな炎となって燃え上がっていく。そして彼は『山羊角』との出会いを通じて、自分が燻っていた場所からはるか高みにある、真の『ペルソナクライン』へと続く道を再び歩き始めることになる。

1 - 1 敗北

記憶が飛んでいた。

半ば反射的に『知覚変換』センス・リアクトのダイレクト・フィードバックのレベルを落としながら、今何をやっていたのだろうかと考える。

ちらりと視線を動かせば、目に入ったのは自分の対戦用アバターの手足だった。ひよる長い手足を持つこの姿は、『黒い銃身』ジェット・パレルと彼自身が名付けたものだ。もっとも名前と異なり、今日は廃虚での対戦だったから、装甲のカラーリングをグレーの都市迷彩にしている。思い出してきた、自分は今対戦中だったのだ。『ペルソナクライン』デュエルモード 感覚同化型ヴァーチャル・リアリティ・アプリケーションの。

「くそっ！」

吠えるように吐き捨てながら、敵の姿を探す。

そうだ、完全に思い出した。とんでもない加速でぶっ飛んできた敵アバターの一撃を喰らって、意識を刈り取られたのだ。

思考内デスクトップのコンソール・パネルで『審判装置』ジャッジへとアクセスし、タイムカウントを確認すると『69』と表示されていた。さっき見た時はまだ『70』だったから、およそ一秒ほど昏倒していたことになる。コンマ何秒の単位で攻守の入れ替わるこの『ペルソナクライン』においては、致命的と言っている隙をさらしていたはずだ。

「それなのに、追撃しなかっただろ？ ナメられてるのかよ……ッ！」

アバターに装着された仮面ヘルメタの奥で、ギリツと唇を噛み締める。

だが今もって敵を捕捉できない自分の不甲斐なさを棚にあげてまで、相手の傲慢を責めることはできなかった。ナメられるだけの醜態はさらしているのだ。

『かつてイケブクロと呼ばれた廃虚』を模した対戦フィールドには、敵の気配はなく静まり返っている。音といえば時折建材の崩落が起こり、建物が倒壊して地鳴りを響かせるのみだ。

「どこ行きやがった？」

センサーの有効範囲ギリギリのところまで、こちらの出方をうかがっているのは間違いない。市販されているセンサー拡張プラグインなど、性能はどれもどっこいどっこいだ。『ペルソナクライン』というアプリに習熟しているのならば、相手のセンサー範囲にアタリをつけるのは、不可能というほど難しいことではない。

それができるだけの技量を持つ相手であるのは認めるが、こうもナメてくれると腹が立つ。あるいはそこまで計算の上で、対戦相手は彼を挑発しているのかもしれない。

「……こんな奴にバカにされてたまるか」

舌打ちをしながら、ごく自然に彼は思考内デスクトップにある、そのアプリケーションを起動した。自分自身で組み上げた、フィールド内にいる対戦相手の位置を特定するプログラムだ。

先述のセンサー拡張プラグインとはまったく性格が異なる。『ペルソナクライン』というアプリのセキュリティ・ホールを利用して、直接対戦相手の位置情報を不正に取得する干渉プログラム。いわゆるチートツールだった。

卑怯な手段という自覚はある。ただこれだけのシンプルなものでも、索敵がシステムに組み込まれている『ペルソナクライン』では、圧倒的な優位が得られるのだから。

だがその歪んだ『圧倒的な優位』は忘れられない蜜の味がして、暗い愉悦が仮面の下にある口元を吊り上げたのを感じた。

アバターの両腕で主武装であるロング・ライフルを構えながら、チートツールが反応を返してくるのを待つ。時間にして一秒にも満たないような刹那の時だが、今の彼にはその数倍か数十倍の長さにも感じられた。

「来い、早く来い……来たっ！」

祈り、願う彼の目に映る『ホロ・モニタ投影視覚』のレーダーに、対戦相手を示すシンボルが一際強く輝いた。彼の立つ、その真後ろに。

「なっ……あがあッ!？」

咄嗟に身体を入れ替えたとき、敵はすでに手にした薙刀のようなグレイヴ武器を振り上げていた。

武器を盾代わりにして、なんとか攻撃を受け止める。だが強烈な打ち込みに、ジェット・バレルの瘦躯が大きく揺らいた。

敵アバターはそのままグレイヴの刃を引っかけるようにして振り抜き、ライフルごと彼を廃屋へと吹き飛ばす。

「ぎっ!？」

叩きつけられて、舌を噛んだ。突き抜けるような痛みを感じる。

すべての感覚が情動的に『リアクト変換』されているヴァーチャル・リアリティ空間 『ワイジョン・スペース思考空間』においては、痛みさえもフィードバックされる。もっとも安全装置があるので、実際に血が出るということはないが。

「危ねえ……噛んだおかげで、また意識トバされずに済んだか」

瓦礫から立ち上がり、コンソール・パネルで半分ほどになった残

りライフ・ポイントの確認をしながら、小さく息を吐く。

自分は二発喰らっただけでフラフラしているというのに、目の前に悠然と立つ敵アバターは、息一つ切らしているように見えない。

長い角の生えた仮面にも、板バネを重ねたような形状の装甲にも、傷一つなかった。当たり前だ、ただの一回だって、こちらは有効打を当てられないのだから。相手のライフ・ポイントは百パーセントだ、一ミリも減っていない。

「くそっ……むかつく野郎だ」

一方的になぶられているようで、とても気分が悪い。

正直言って、これほどの相手と立ち合うのは初めてだった。それほど強いのに、名前が知られていないというのが信じられない。手玉に取られている自分でさえ、イケブクロ・エリアではそれなりに知られた存在であるというのに。

どこかうさん臭いと感じて、チートしてんじゃねーのかと言いかけるが、慌てて口をつぐむ。

自分の事を棚に上げすぎた。やましいのは自分であって、むしろ藪蛇になりかねない。

二連続でダウンを取られて、自覚以上に頭に血が上っているのだろう。汗をかかないアバターであるはずなのに、じつとりと背中が冷たいもので濡れていくような錯覚を覚えた。

『この程度か。あくどく勝っている奴がいるって聞いて、久方ぶりに繋いでみたけど……思ったほどじゃあない、期待はずれだな』
「なっ!?!」

間合いを取りながら息を整えていたジェット・バレルに、手にしたグレイヴを突き付けながら、対戦相手であるアバター『コラト・ホーン山羊角』は落胆らしきため息をついた。

プライバシーを守るための標準装備である、アバターのボイスチ
エンジンで加工された、男だか女だかわからない声がやけに腹立
たしい。

タイミングが良すぎるほどの見透かしたような言葉に、怖気のよ
うな不快感が胸の奥にいつぱいになる。

「な、なんだよッ、お前はッ!？」

『どもるな、器が知れるよ。痛い腹があるからといって、その態度
はよくないな』

「ぐッ……!」

証拠などあるはずがない。足がつくようなへまはしていない。い
ないが　やはり見透かされると焦りは隠せなかった。

動揺し、激昂しそうになる気持ちを抑えて、バックジャンプで一
気に距離を取る。こんな近い距離では、射撃タイプであるジェット・
バレルは十分な能力を発揮出来ない。何はなくとも間合いだ。怒り
は銃弾に込めて叩きつけてやればいい。

『おやおや、案外と冷静だ』

「うるっ……せえよっ!」

装甲のハッチを開き、内蔵されたミサイルをばらまく。命中は期
待していない。ただ敵の足を止めたかった。あの踏み込みは脅威だ。
気づいた時にはもう、目の前にいるのだから。

弾幕が廃墟ごと敵の周囲を吹き飛ばす。粉塵が舞い上がり、煙幕
となってベールのように視界を奪った。だが、これで終わりではな
い。ここからがむしろ本番、真骨頂。

向こうは見えないが、自分は見える。座標取得プログラム最大の
恩恵は、この状態にあるのだ。

「そこっ！！」

ロング・ライフルを構え、煙幕の中に叩き込む。同時に新しいチートツール　弾道自動補正プログラムを起動して、念には念を入れる。

装甲に着弾した金属音、そして車輪の空転する甲高いスキール音が、煙幕の中で悲鳴のように響いた。数発攻撃を受けつつも、小刻みなストップ・アンド・ゴーで敵アバターが追撃をかわしているのが、リーダーの反応でわかる。

なるほど、と思った。あの音が敵の機動力の正体だ。踵部分に装着された車輪　グライド・スピナーと呼ばれている、地上滑走システム。

扱いが難しいこのシステムの使用者はそれほど多くないが、確かにあれを装備しているのなら、爆発的な機動力にも納得がいく。しかもスキール音の大きさを考えると、かなり大出力のタイプを装備しているのだろう。

「……この状況で直撃を避けるか普通！？」

仕留めきれなかったことに、苛立ちがさらに募る。視界を奪った上でなお、敵アバターに直撃を与えられなかったことはショックだった。

「ただど追い詰めちゃあいる。あっちとしては良くないカタチのはず……だったら」

彼は『不正^{チーター}改変者』、卑劣なプレイヤーだ。しかし腕がないわけではない。状況を分析し、予測することにかけては自信があった。そうでなければ、状況に応じて様々なプログラムを使いわけるといった芸道をこなせるはずがない。

『はあっ！』

「そう来るよな！」

煙幕を突き破りながら、猛然と突進してくる敵アバター。速度、そしてタイミング共に彼の予想通りだった。こう来ることは、わかっていた。ならば、やりようはある。

グライド・スピナーは『地上を滑走する』という性質上、その機動がほぼ平面に限定されるという弱点がある。相手の上下の機動に追従するのが難しいのだ。不可能ではないだろうが、それはグライド・スピナーという機構が本来想定している動きではないため、どうしても無理がある。ジェット・バレルはそこを突いた。

「らあーっ！！！」

アバターの脚部に力を込めて、大地を蹴り上げる。同時に身体各所の姿勢制御用スラスタを点火。ちょうど敵が水平に振り抜いた、グレイヴの上スレスレを飛び越える。

目の前には、滑走していく無防備なゴウト・ホーンの背中があった。重なりあった装甲は背中にも及んでいるが正面ほどではない、撃ち抜ける。逆さまになったままそう確信し、ライフルを抜き撃ちした。はずだった。

集中が意識を加速させ、『時間』を置き去りにする。無限に引き延ばされた刹那の瞬間。身体はもどかしいくらいに遅くしか動かず、ただ精神だけが加速された『世界』でそれを見た。

グライド・スピナーで突っ込んできたゴウト・ホーンの身体が、突然斜めに倒れる。バランスを崩したのではない、わざとだ。あれは倒したのだ。事実そのまま地面に手を突くと、腕を支点に百八十度ターンして、突っ込んできた勢いそのままに戻って来た。

『甘いよ』

「な、なんっ……」

だ、と言い終えるよりも早く、懐に入り込んだゴウト・ホーンの肘打ちが、ジェット・バレルの胸板に突き刺さる。

「が……はっ!？」

衝撃で息が詰まる。加速されていた精神が我に返り、痛みと共にアバターと同期する。

ジェット・バレルの身体は、大きく後方に跳ね飛ばされていた。決してペルソナアバターとしては重い方ではないジェット・バレルだが、同じくらいの体格相手にこれほどあっけなく吹き飛ばされない。

敵はグライド・スピナーの突進力を殺さず、そのままあの肘打ちに乗せていたのだ。容易くできることではない、だがそうでなければ説明のつかない威力だった。

廃墟をぶち壊し、再び瓦礫の中へと逆戻りしたジェット・バレルの受けたダメージは深刻だ。

大して強化もしていない胸部装甲は見る影もないほどに砕け散り、内部のプログラム・フレームが露わになっている。

コンソール・パネルに目を移せば、ライフ・ポイント残量だって五パーセントにも満たなかった。もしも肘ではなくあのグレイヴで貫かれていたら、今頃はとくにゲームオーバーとなっていただろう。

「こいつ……!」

格が違う。

認めなくてはならなかった。このアバターは、凄まじく強い。これほどの相手がまったくの無名であるなんて、信じられなかった。

かといって、これから有名になる大型新人という感じもしない。

場慣れしすぎているのだ。圧倒的なまでの対戦経験が、あのゴウト・ホーンというアバターの戦闘能力を支えていると直感した。

はつきり言つて、彼が作り上げたジェット・バレルのポテンシャルは低くない。総合性能でならば、おそらく同ランクのペルソナアバターの中でも高いほうだろう。それだけのアバターを構築する技術が、彼にはあった。

だが敵は、ジェット・バレルが戦法を確立する上で生まれた弱点
装甲の強度であつたり、接近戦での立ち回りだつたり を、
的確に突いてくる。それは数多くのペルソナアバターと戦つた経験
がなければ到底なし得ない、老獪とさえ言える動きだ。

「ふん、正体を隠して正義の味方気取りつてわけか。よくやるぜ」
きつとランキング上位の、どこぞの有名プレイヤーのダミー・ア
バターなのだろう。彼はそう結論付けた。

市販パーツを適当に組み合わせただけの野暮つたい外見は、油断
を誘うための欺瞞にしかもはや思えない。

『ペルソナクライン』の上位ランカーが能力にリミッターをかけ、
アバターの外見を変更して下位フィールドで戦うという話ごくま
れにある。大抵の場合はいわゆる『初心者狩り』か、その『初心者
狩り』に対する制裁目的だ。

このゴウト・ホーンの場合は口振りからして後者に近い。おそら
く最初から自分を倒すことが目的で乱入してきたはずだった。

どこで自分は目をつけられたのか。この一種無法地帯と化してい
る下位フィールド 別名『外道フィールド』^{スヒット・ダンブ}で、チートを行う者
はそれほど珍しくない。チート使いの事情は様々にあるが、少なく
とも自分だけが狙われる理由はないはずだった。

それでもなおピンポイントで『制裁』を加えに来たのは、それこ
そ正義感の権化のようなものなのか、あるいは単にどこかで そ
れこそ現実^{リアル}も含めて 買った恨みを、自分が知らないだけなのか
判断は付かない。

彼のそんな困惑した様子が伝わつたのだろう。ゴウト・ホーンは

軽く肩をすくめると、自嘲するような口振りで言った。

『なに、正義を名乗るつもりはないよ。ただの憂さ晴らしみたいなものさ』

「……本当なら、迷惑な話だぜ」

『そっちが言うべき台詞ではないと思うけど?』

「ああそうかい!」

瓦礫から身を起こし、なんとか立ち上がる。

強がっては悪態をついたところで、満身創痍なのは変わらない。

もはや勝ち目はゼロだろう。万に一つの勝機もない。

ただし“うやむや”には持ち込めるかもしれない。

コンソール・パネルに目を走らせると、タイム・カウントは『37』と表示されていた。残り時間を使って死ぬ気で逃げ回り、首尾良く対戦用バトル・フィールドの外へと飛び出してしまえばノーゲームだ。

ここまで腕の差があるとそれすらも難しいとは思うが、こういう時のために組んだ緊急脱出用チートプログラムも準備してある。時間さえ稼げば、不可能なことではないだろうと考えていた。

「けど……せめて一発くらいは当てないと、ムカついたまんまだ」

ノーゲームになったとしても、対戦成績に傷がつかないだけだ。

精神的には完敗、向こうも引き分けた気にはならないはず。腰抜けと思う存分あざ笑うことだろう。

「そいつはどう考えても悔しいよな」

一矢報いる それをやれたらある意味勝ちだ。そのくらい実力に開きがあると、彼は自分と相手の戦力差を計算していた。

ずいぶん情けない事を言うものだ、苦笑してしまう。

しかし今はそれが精一杯で、そしてそれすら満足にできないであろうことがわかっていて自分が情けない。

もっとも相手は煙幕の中ですら、弾道自動補正プログラムを凌駕するような化物だ。自分が心血注いで開発したツールがこうまで役に立たないのには信じがたいものがあつたが、事實は事實として認めなくてはならない。やるなら、ツール抜きのカチだ。条件は尚悪い。それでもやるか……？

しばし逡巡した後、腹をくくつた。たまにはこういう対戦もありだろうと、自分を納得させる。

「のるかそるかは好きじゃあないが……」
『ん……？』

ライフルを構え直したことに反応して、ゴウト・ホーンが頭を上げた。その名を象徴する、ねじくれた長い角の奥にある仮面の目が、じろりとジェット・バレルを睨む。

『仕掛けてくるんだ。意地を見せる気かな？』

「お前の完全勝利を阻めば、俺の溜飲^{パーフェクト}つてやつは下がるんでな」

『それはずいぶんと志が低い』

「何とでも言いやがれ。どうしようが俺の勝手だ」

『確かにね……では来たまえ、引導を渡してやるっ』

「気に入らねーな、その芝居がかった台詞と上から目線。おごるな、ヤギ野郎」

『……目線の角度が力の差だよ。チート^ごときでは埋まらないほどのね』

「ほざいてるッ！」

横っ飛びで移動しながらライフルを連射したのと、ゴウト・ホー

ンがグライド・スピナーを急発進させて突っ込んできたのは、ほぼ同時だった。

『今の打ち込みを避けた！？』

グレイヴの刃が空を斬り、敵アバターが初めて驚いたような声を上げた。

たしかにゴウト・ホーンの打ち込みは速い。しかしいい加減、目も慣れた。読みが当たればギリギリ反応できなくはない。

そもそも、さっき一度は避けたのだ。もう一度やれないわけがない。

『まさか、かわされるとはね』

「直線的なんだよ、グライド・スピナーは！」

『そうは言っても、なかなか反応がいいじゃないか。段違いだった、さっきまでとは！』

「だから、その上から視線をやめやがれ！」

残っているミサイルを全弾バラ撒いて、旋回中の相手の周囲を吹き飛ばす。

結局のところ、射撃型の要点はここにある。逃げる空間を削り取られれば、あとは当たりに来るしかない。動いている標的を狙って当てるのではなく、標的に動いてもらって当たらせることこそが基本にして極意。

もっともこのゴウト・ホーンほどの強者であれば、追い詰めてもなお刹那のタイミングで避けてくるだろう。もう一押し、もう一押し何かで虚を突かなくては、尋常でない相手の人間性能を凌駕することは叶わない。

ゴウト・ホーンはひゅん、ひゅんと踊るように風を切りながら、グライド・スピナーを細かく加減速させてジェット・バレルの撃ち

込む弾丸を避けていく。

だが、その場から踏み込んでくる様子はまだ見せない。戦いぶりの変わったジェット・バレルを警戒しているようだった。

『声色でわかる。腹をくくると強くなつたね』

「てめえにや関係ないことだ！」

『そうでもない。今のほうがずうっとマシだ、少し見直したよ。訂正しよう、わざわざ繋いだ甲斐はあった』

「勝手なことをッ！」

『だが手遅れだ。そんな残り体力では僕に一発当てるのだって、もはやままならないはず……！』

「そうだろうなあ、そうだろうよ！ わかってんだよ、そんなことは！」

あくまで冷静な相手と、焦りを隠せない自分。

ああそうか、実力の差というのはこういうときにも出てくるのかと、初めて知った。強者は決して慌てない。どんなときでも冷静沈着なのだ。そしてそうでいられない者が、弱者の位置に立つことになる。

『わかってるなら、あきらめたらどうかな？』

「はん、やなこつた」

『なかなか往生際が悪い。そろそろ終わりにしようと思つてたのだが』

「思惑通りにいかせてたまるか。粘れるだけ粘ってやるよ！」

ライフルの残弾を撃ちきるまでは、この状態を維持出来る。だがリロードの際に起こる一瞬の間、そこで間違いなくゴウト・ホーンは勝負を決めようと襲いかかってくるだろう。その時にはもう、間合いはゼロになる。こちらは一発撃てるか撃てないかがせいぜいだ。

『いつまで続く、その曲がった根性で！』
「弾丸切れまでさ！」

そう言った瞬間、引き金が空しい金属音を立てた。まさしく今が弾切れだった。

ライフルの自動装填装置オートリローダーが起動して、アバターのアイテムインベントリから弾丸のデータをロードし始める。

『もらった！』

好機とばかりに、猛然と間合いを詰める敵アバター。これまで以上に速かった。

逆にジェット・バレルは一呼吸以上遅れている、リロードが間に合わない！

(何か、何かないか!?)

ギリギリの状況の中で、必死に考えを巡らせる。

この場に及んで、今さらチートに頼るものか。そもそも今からプログラムを起動したのでは間に合わない。

これまでか 諦めが精神を支配しかけたその瞬間、閃くものがあった。目に映っていたのは、ホロ・モニタの片隅にあった『ペルソナクライン』のデフォルトコマンドリスト。

検証している余裕はない。直感を信じて、そのコマンドを実行する。

「アーマー・パージッ!!」

『な、なにッ!?!』

瞬間、ジェット・バレルの全身が爆裂した。装甲が吹き飛び、分解され、『情報デブリ』と化して発光しながら対戦フィールドの間へと消滅する。

『アーマー・パージ』 チートでもなんでもない、単なる『ペルソナクライン』の基本ゲームシステム。彼はそれを利用した。

ペルソナアバターは、任意でその装甲を排除できる。アバターのパラメータには重量の項目も存在するため、『アーマー・パージ』は、それを瞬間的に軽量化するための最終手段として存在するシステムだ。

ペルソナアバターの重量は、搭載された『アイ・テイ・アーマー情報密度装甲』の強度に由来する。単純に、密度が高く装甲は強靱であるほど重量は重くなるのだ。

よって重装甲であればあるほどアーマー・パージの恩恵は大きい。が、ジェット・バレルのように軽装甲の射撃型にとっては、わざわざ装甲を排除することに大したメリットはない。

だが十分だった。爆発して、光って消えるだけで十分だったのだ。目の前で閃光が炸裂し、一瞬ではあってもゴウト・ホーンの動きが止まる。

確かにわずかな、ごく短い時間のことであつたかもしれない。しかしリロードの時間を稼ぎ、最後の一発を撃ち込む。ただそれだけのためには、ほんの刹那で事足りる。

「ぶち……当てるッ!」

『クッ!』

狙うはゴウト・ホーンの頭部。当たれば一発逆転もあり得る急所狙いだ。

どうせ狙うなら貪欲に。しくじったところで、失うものなど勝ち星くらい。背中を見せずに倒れたのなら、男の面目は保たれる。

そんならしくない想いに高揚感さえ抱きながら、引き金を引いた。

しかし、

『……惜しいな。もっと地力を鍛えていれば、この首だって獲れただろうに』

「ッ!？」

明暗を分けたのは、反応速度の差だった。

普通の相手ならば、おそらくジェット・バレルは敵の頭を撃ち抜くことができたろう。だがゴウト・ホーンは普通の相手ではなかった。自分よりもはるかに強力なペルソナアバターであるという単純にして冷酷な事実が、最後の一手を反故にする。

眉間を狙った銃弾が、目標を捕らえることはなかった。ギリギリのところまでゴウト・ホーンが首を動かし、急所を外したのだ。

弾丸は額からこめかみを削るようにかすめると、ゴウト・ホーンの由来であろう、ねじくれた角に当たる。金属を叩き割るような音がして、左側の角が根本から折れた。

致命傷、ならず。ここまでだった。

「あーあ。ま、こんなもんか。所詮は俺だしな」

『卑下することはない。見事、と言わせてもらおうよ』

「そいつは、どう……も」

ごん、と身体に縦向きの衝撃が走り、頭から真つ二つに斬り裂かれる。

ライフ・ポイント残量がゼロとなり、アバターの視界がゲームオーバー時のノイズ・エフェクトに切り替わる直前、片側の角を失ったゴウト・ホーンと眼が合った。

冷たい仮面に隠され、素顔など見えるはずはない。しかし何故だか、相手は満足げに微笑んでいるような気がした。

1 - 2 真壁陸朗

高層ビルのエレベーターに乗っているような浮遊感と共に、意識が現実へと引き戻される。

『知覚変換』によるヴァーチャル・リアリティ空間『思考空間』へのアクセスを終えたジェット・バレル 真壁陸朗は、ゆっくりと眼鏡の奥にある両目を開いた。

「……何時だ？」

時間の感覚が狂っている。直前までやっていたことを、よく思い出せなかった。『思考空間』の最深部 現実よりも時間が速く流れる『深層球殻構造体』にダイブしていると、こういうことがよく起こる。

比較的時間の流れが緩やかなスフィア表層部で半日以上潜っていたから、こっちの感覚では一時間ちよつとは経っているはずだ。

左手に装着した極薄の『パーム・コミュニケーションター掌装着型端末』に意識を送り、思考内デスクトップの時計をホロ・モニタ上に呼び出す。四時四十二分だった。

「ちようど一時間、だな」

陸朗がいるのは学校の図書館だ。人気のあまりない、この奥まった個人用読書ブースから『思考空間』へアクセスするのが陸朗の日課だった。

家よりも回線が太く、快適な環境でグローバルネットを利用できる、というのがその理由だ。

普通の生徒の中には、学校側にログを取られるのがイヤだからという理由で、学校からの『思考空間』へのアクセスを控える者が少

なくない。

繋ぐのは陸朗のように一種開き直っている人間がほとんどだ。とくにスフィアへの直通回線の軽さは、利用者の少なさがもつとも大きい理由に違いない。

もつとも陸朗にしてみれば願ったり叶ったりだ。学校でもやるというよりは、学校こそが彼にとつて『ペルソナクライン』をプレイするために適した環境だった。

「さて、どうすっかな……」

『日課』を終えたはいいが、中途半端に時間が空いてしまった。

家に帰るにはまだ早い。かといってもう一回『ペルソナクライン』にログインしたら、おそらく戻ってくる頃には運動部の帰宅と鉢合わせになるだろう。ああいう連中と、わざわざ同じバスに乗るのもバカバカしい話だ。

それに 今日のもう、ログインしたい気分ではなかった。

こつこつと机を叩きながら、窓の外へと目を向ける。赤い夕日を受けてまぶしそうに目を細めた、神経質そうな面差しをした少年がそこには映っていた。

しかしいつもならば『思考空間』から戻って来たあと、どこか鬱屈としたものを溜め込んでいたはずの顔が、今日はやけにすっきりとしているように見える。

理由ははつきりしていた。今日唯一の黒星のせいだ。

「……何だありゃ、バケモノか」

ゴウト・ホーンの事を思い出すと、苦笑しか出ない。

スペックで劣るダミー・アバターを用いてあの強さ。本気を出したらどこまで強いのか、まったく想像もつかない。ああいう不公平なまでに強い存在が『上位ランカー』なのだ。うらやむよりも

先に納得してしまった。

冷静になってみると、どうしてああまで意地を張ったのが、わからない。最後こそ欲を出したが、『敵わない相手だ』というのわかりきっていたのに、どうして意固地になったのか。

自分を納得させられそうな理由はいくつか思いつくが、そのどれもが口に出すには恥ずかしすぎて、今の陸朗には受け入れがたいものがあつた。

冗談じゃない、あんなやり取りはもうたくさんだ。俺は戦うのが好きなんじゃなくて、勝つのが好きなんだ。勝ち目のない戦いなんて、逃げてしまえばよかつたんだ。

しかし自分にそう言い聞かせてみても、そろそろしいほどの嘘は自身すらも騙すことはできなかつた。

なぜならそれは詭弁でしかなく、彼にもかつてはあつたからだ。

ああいうものに憧れて、ああいう風になりたいと思つていたことが、けれども、なれなかつた。

雲上人めいた上位ランカーたちを見上げながら、勝つたり負けたりを繰り返す毎日。不甲斐ない自分に苛立ちを覚え、いつしか『ペルソナクライン』にログインする目的が、ただ『勝つこと』のみへと変質していき、チートに手を染めるようになった。それがいつだった思い出せなくなつたころ、ついに出会つた『本物』が、あのゴウト・ホーンだ。

「格が違うよな、やっぱり」

一蹴された、と言つていいだろう。口先で自分を慰めても意味はない。

強いとはああいうことなのだと、かつて憧れたのはああいうものだったのだと、骨身に沁みて理解した。

速くて強い。ゴウト・ホーンというペルソナアバターを説明するのは、ひどくシンプルな言葉で事足りる。動きにも無駄がほとんど

なかった。

「……最短距離を突いてくるんだよな、あいつ」

左腕を宙で動かすようなジェスチャーを行い、思考内デスクトップから先ほどの戦闘のリプレイ動画を呼び出す。すぐさま神経を介し、ホロ・モニタへと映像が浮かび上がった。普段ならこういう『敗北の記録』はさっさと消去してしまうのだが、今回ばかりは特別に残しておきたい気分だった。

まだチートに手を染めていなかったころは対戦の度にリプレイを確認し、自分や他人の動きを研究したものだ。それを思い出し、ずいぶん懐かしい気分になる。

ゴウト・ホーンの動きは、リプレイによって第三者視点から見ても目で追うのがやつとというほどのものだった。

静と動の使い分けが抜群に上手いため、ただでさえ速いの、より一層見切りづらい動きになっている。これでは対戦中、目で捉えきれなくても当たり前だ。

性能にリミッターをかけた、ダミー・アバターでさえ並の上位ランカーと同等以上なこの動き。本来のペルソナアバターで戦えば、この何倍も速いはずだ。相当な腕利きがゴウト・ホーンの正体なのだろうと、容易に想像できる。

破れかぶれの一撃だったとはいえ、そんな強者の角を一本折ったのだ。自分も捨てたものではないかと、少しだけ嬉しくなった。

「ま、結局はこの時に勝負はついてたんだろうけどさ」

リプレイは戦いの終盤、ジェット・バレルがカウンターで肘打ちを喰らい、吹っ飛んだところまで差し掛かっていた。

「一歩間違えたら腕折れてんじゃないか、アレ。よくもこう思い切

った機動ができるもん……だ……？」

腕を軸にして、グライド・スピナーの勢いを殺さずにターンするゴウト・ホーン。同じシーンを巻き戻し、繰り返し再生する。気になることがあった。

「どっかで見た、間違いない。どっかで見た動きだぞ、これ」

陸朗は自分のプレイのみならず、他人の対戦リプレイもかなりの量をチエックしている。

身の回りに親しい対戦仲間のいなかった彼は、リプレイを分析することで他人の動きや戦術を研究していた。とくにランキング一桁台に位置するマスター・クラスと呼ばれるペルソナアバターたちの動きは、何度も繰り返し見たものだ。それこそ目に焼き付けるように。

そんな忘れようもないリプレイ映像の一つと、今回ゴウト・ホーンが見せた動きに、どこか共通点がある気がした。

「まさか……いや、でも」

マスター・クラスは数千人とも数万人ともいわれるペルソナアバターの頂点に立つ存在だ。その数はランキング一桁台というところからわかるとおり、全部で九人しかない。しかも陸朗の地元である池袋界隈に出没する者となるとただ一人 『剣の魔女』^{ストーリーガ}と呼ばれるペルソナアバターのみだった。

ただ、彼女はここ一年ほど『ペルソナクライム』内に姿を見せていないと聞いている。引退したのではないかという噂すらあった。

はやる心を抑えながら自分のライブラリにアクセスし、リプレイをダウンロードする。やけにもたついて思えるのは、興奮のせいだろうか。

「よし……」

ほどなくダウンロードが終わった。

わずかに緊張して、ごくりと唾を飲み込む。

再生が始まると、リプレイにはオペラピンクに輝く装甲を持ったペルソナアバターが、大剣を構え猛然と斬り込んでいく姿が映っていた。

黄金色の髪のような放熱索を翻し、ゴウト・ホーンをはるかに上回るスピードでフィールドを駆け巡るその動きには、一種の感動さえ覚える。それがストレーガだった。

ストレーガはグライド・スピナーを使っているわけではない。彼女の機動力の根幹にあるのは全身に装備した無数のスラスターだ。その推力を精緻にコントロールすることで、三次元的な高速機動を実現している。

地上を滑走していたゴウト・ホーンに比べると、彼女は空間を立体的に使うため、一見その動きは全くの別物だ。

しかしよくよく見ると、静と動の切り替え　細かい加減速や、スピードを維持したまま腕や踵を軸にするターンなど、緩急を効かせて鋭角に動くクセのようなものが、両者には共通しているように思えた。

「確証はない、よな……」

似ている、というだけだ。思い込みだと言い切られたら、納得してしまう程度の根拠に過ぎない。反論されたらすぐに主張を引っ込める程度のものだ。

だがゴウト・ホーンやストレーガが得意とする鋭角機動は、刹那を見切る優れた目と失敗を恐れない強い心がなくては、なし得る事ではない。そしてそれを可能とするペルソナアバターが、そう何人

もいるとは思えなかった。

1 - 3 呼び出し

『図書館の利用について、確認したいことがあります。放課後、生徒会室にまでお越し下さい』

そんな電子メールを陸朗が受信したのは、翌日の昼休みのことだ。教室でコロッケパンをかじりながら、ホロ・モニタ内で差出人のところに目をやれば、そこには『生徒会』と書かれていた。ご丁寧にデジタル印章まで付いている。

手の込んだ冗談だとは思えなかった。わざわざ陸朗一人を陥れるのに、生徒会の名前を騙る必要などないのだから。

(生徒会？ なんでまた？)

図書館の利用というのはもちろん『思考空間』へのアクセスも含めての話だろうが、こうして目を付けられるほど、常軌を逸した使い方はしていないはずだった。

学校でスフィアを含めた『思考空間』の利用そのものは校則でも認められていたし、『ペルソナクライン』などスフィア内で展開するアプリケーションについても、直接制御こそできないものの、その利用自体は学校側が把握できるようになっている。当然、問題があれば遮断が可能だ。

そして『ペルソナクライン』は多少マイナーではあるものの、健全なヴァーチャル・リアリティ・アプリケーションである。学校側が名指しで放課後や休み時間における個人的な利用を制限しているアプリだということはない。

要するに、陸朗には呼び出しを受けるような心当たりはまったくないということだ。

「ま、考えてもわかるわきゃねーか」

正確な言葉ではない。正しく言えば、陸朗は考えることを最初から放棄していた。その原因は、今か今かとくつつきそうになっているまぶたにある。

眠そうな理由はもちろん夜更かし　昨日帰宅したあと、遅くまで対ゴウト・ホーン用のアバターセッティングをやっていたせいだ。こんなにまで『ペルソナクライン』のことだけに集中したのは、本当にずいぶんと久しぶりだ。

等身大の人型機動兵器に意識をダイブして対戦するという、実にマンガチックな設定を持つ『ペルソナクライン』というゲームは、プレイヤーの分身となるペルソナアバターの構築において、過剰なほどの拡張性を持つ。その気になれば、いくらでも凝れるとまで言われているくらいだ。

とはいえ、ただリアルマネーをかければ強くなるというものでもないし、そもそも単純に強いアバターを作ればいいというものでもない。

たとえば昨日リプレイで見た、ストレーガという最強クラスのアバターを陸朗が使ったとしても、ろくな戦果は上げられないだろう。中身であるプレイヤーとペルソナアバターの相性まで考え、無駄を削り最適化していく。そういう緻密で地道な作業が求められる。それがアバターセッティングだった。

もともと凝り性で職人気質のある陸朗は、この作業が嫌いではない。興が乗ったときなど、それこそ何時間でもいじり倒していたものだ。昨夜のように。

そうしなくなったのはいつだったか　思い出すことはできなかつたが、想像することはできる。しかしそれは“その日から現在までの”自分を否定することにも等しくて、考えを無理矢理頭の隅へと追いやりセッティングに没頭した。

とはいえ実のところ、対ゴウト・ホーン用のセッティングなどす

る気はなかった。二度と戦わないつもりだったのだから当然だ。

しかし帰宅後も対戦リプレイを繰り返し見ていると、心の奥底がうずいて、いてもたってもいられなくなった。地力で劣る自分が、どうやってたらあの強力なアバターに一泡吹かせることができるのか、考えても考えても止まらなかった。

有効と思える武装の選定、アイテムインベントリの整理と拡張、それによって不足したアバター・ポテンシャルの再配分、変更した武装や能力に合わせた戦術立案。やることはいくらでもあった。自宅のサーバーを利用しながら夢中になって取り組むうちに、気付けば空が白んでいて　結局、二時間ほどしか寝ていない。

午前中の授業など、話半分以下にしか聞いていなかった。居眠りしなかったのが、奇跡的ではある。

学校の成績に関しては赤点さえ取らなければいいやと諦めている陸朗だが、だからこそ授業態度で目を付けられるわけにはいかない。少なくとも見た目くらいは、殊勝に授業を受けていると取り繕わなければならぬのだ。

ならば、昼休みに少しでも寝ておくべきだろう。授業は午後も続くのだ、居眠りの誘惑に耐えるのは、昼飯を食べてからが本番だ。だというのに、目を閉じると脳裏に浮かぶのはメールの文面だ。考えても分かるはずがないと結論したはずなのに、不思議だった。

本能的なものなのだろうか。陸朗はメールから、言いようのない危機感に似たものを感じていた。

確かにこれまでは大丈夫だった。

だが状況が変わったとすれば　誰かが突然、目に余る、禁止にしようとか言い出した可能性はゼロではない。

とくに今年の生徒会は、例年になく活発に活動している。まるで『改善』することに餓えているかようだ。もしかしたら図書館利用時における自分の長時間アクセスが、そういう生徒会の『やる気』にロックオンされてしまったのかもしれない。

「はあ……めんどくさいな」

パンの切れっ端を飲み込んで、顔をしかめる。大して美味くもない購買のパンが、余計に味気なく感じられた。

どれほど気分を損ねていようと、生徒会にいちいち逆らうつもりはない。学校で接続するなど言われたら、素直に従うつもりだった。もともとは放課後、不自然なくらい回線が空いていること気付いたから、有効活用していただけたことなのだ。

しかしこれから禁止にするというのなら、その旨をメールで伝えてくれればいいのだ。わざわざ生徒会室にまで呼び出すというのが気に入らない。

そこまでのことか、と思う。遊びで学校の回線を利用しているのは確かに褒められるようなことではないが、ここまでの仕打ちは何かおかしい気がした。

もちろん成績が下がっているなどであれば、呼び出しという事態もありうる。

だが幸いにも陸朗はどの科目においても赤点を取ったことはなかったし、だいたいそれならば担任が生活指導の担当だ。生徒会が首を突っ込んでくる理由にはならない。そう反論したところで、聞くような相手ではないのが厄介だ。

目をつけられたら終わり、というのが生徒の中で密かに流れている生徒会の噂だ。半分は与太話だとしても、一般生徒からの圧倒的サポート背景に、相当な強権を振りかざしているのは事実だ。

どうしてそんなことが可能なのかと言えば、マンガみたいな話だが、これはもう『生徒会長』ただ一人のカリスマ性にあつた。

学校生活に義務感以外のものを見出さず、友達どころか名前を知っている生徒すら少ない陸朗でも、彼女のことだけはそれなりに詳しくかつた。そのくらい、今の生徒会長は校内で有名人だ。

曰く、『ミス・パーフェクト完全無欠』。曰く、『歴代最強の生徒会長』。曰く、『生まれついでに統率者』などなど、彼女を称える言葉は枚挙に暇が

ない。

陸朗自身はそうした空虚な形容をする輩を嫌っていたが、今年の生徒会長という存在がそう言われるほどの傑物である、ということには理解していた。

もつとも理解しているだけで興味はない。無視できるのなら無視していただろう。そう、こんな風にちよっかいをかけてこなければ、存在すら気にもとめなかったはずだ。

(……けど変だな。図書館の利用なら図書委員会の管轄じゃないのか?)

クラウド・コンピューティングの急速な発展によって、ネットワーク・コミュニケーションが成熟しつつある現代では書籍のデジタル化も進み、紙の本というものがコレクション目的の嗜好品となりつつある。

だがそんなご時世でも、学校に図書館というものは存在しているし、司書を手伝う図書委員会なるものも存続していた。

存在自体は旧態依然とした教育者側のノスタルジーが詰まったものであることは違いないだろうが、陸朗は図書館という施設が好きだった。

単純に両親が本好きという好事家の家庭に育ったこともある。そして何よりも図書館は利用者が少ないということがいい。

学校生活というものをわずらわしく感じている陸朗にとって、図書館はパーソナルスペースに近い感覚でいられる、数少ない場所だった。

しかし、その憩いの場に今生徒会からのメスが入れられようとしている。心穏やかなわけはなく はつきり言えば不愉快だ。

しかも図書館を管理する図書委員会ならばともかく、何故かその頭越しに生徒会が直接自分に干渉しようとしているのだ。納得はできないし、不思議だった。

「行ってみりゃ、わかるんだろうけど。行きたくねえなあ……」

生徒会室に呼び出されるといのは、生徒たちの中では特別な意味を持っている。それも良きにつけ悪きにつけ。

生徒会室に入っていくところを見られただけで、校内ネットワークで尾ひれがついた噂があつという間に広がり、『次の犠牲者』が出るまで行く先々でひそひそと囁かれる羽目になるだろう。そのくらい影響力のある存在なのだ、今の生徒会は。

この学校に限らず、ネットワーク社会が抱える問題は、二十一世紀初頭から本質は何も変わっていない。『情報の真偽に関わらずあつという間に拡散する』ことは、情報化社会の大きなメリットであり、デメリットだ。扱いを間違えれば、手痛い火傷を負うことになる。

もつとも、そういう危険性さえ上手く利用できる人間こそ、時代の成功者となるのだろうが あいにくと一介の中学生に過ぎない陸朗には、まだ縁のない話だった。

彼にとって当面の問題はネットワーク社会の抱える病巣ではなく、降って湧いたような災難と、退つ引きならない状況のほうだ。

行かないという選択肢はない。無視すれば催促のメールが来ることは目に見えているし、当然だが心証も悪くなる。わざわざ悪い方へと自分を追い込んでいく必要はない。

結局はなるべく他の生徒に見つからないようにしながら、生徒会を訪ねるくらいしか取り得る手段はないだろう。

放課後、という曖昧な時間を指定されたのは幸이었다。せめて部活動をしている生徒が移動するまで待つて、生徒会室に向かえばいいだろう。

そこまで考えて相手が時間を決めたとはいえないが、こと生徒会に関しては何があつても不思議ではない。自分でもずいぶん被害妄想めいたことを口にしていていると思つてゐるが、たった一通のメール

のせいで自分が追い詰められたのは事実だ。

「まいったなあ……」

また、ため息。このまま放課後まで数時間、憂鬱な気分でないく
てはならないと思うと、そのこと自体がまず憂鬱だった。

1 - 3 呼び出し（後書き）

登場人物の少ない小説だな…… W

1 - 4 秋月雪乃

生徒会室の扉は他の教室のような自動ドアではなく、今時オートロックすらついていない、古めかしい両開きの扉だった。ただ古いというわけはもちろんなく、立派な彫刻の施された天井まである木製の扉は、陸朗のような人間が見ても金がかかっていることだけはわかった。

まるで生徒会の権力を象徴するかのような扉だ。似つかわしいといえは似つかわしいが、こういう権威主義的な趣味はどうも好きになれない。気後れしてしまう。

基本的に陸朗は小心者だ。世間様と波風を立てずに生きていきたいと思っっている。シヨッキングでスリリングなイベントは、仮想現実の中だけでたくさんだ。

だがそんなふうを考える彼が、今こうしておそらくは入学以来、もっともシヨッキングでスリリングな状況に立たされているのは、なんとも皮肉なことだった。

どうしよう ドアをノックしようと手を上げたまま、固まること数分。叩くという簡単なはずの行為に気後れして、手が震える。

周囲に人はいない。なのに、緊張で口の中がカラカラだ。つくづく現実リアルの自分は臆病なのだと思ひ知らされる。たかがこの程度のことであたふたするのだから。

「うーん、早く入ってきてくれないかな」

「ひうつ!?!」

「誰かに見られたくないのなら、そこで突っ立っているよりかは、入ったほうがよっぽどマシだと思うけどね?」

その声は、生徒会室の扉の中から聞こえた。扉越しなので少しくぐもっているが、少女の声だ。諭すような口振りだが、それでいて

反論を許さない毅然とした印象を受ける。

逆らえない、と直感した。

「あ、あ……」

「はーやーくー」

「は、はいっ！」

ノブに手をかけると、それは大した抵抗もなくスムーズに回った。ぎいっと見た目通りの低い音を立てながら、ゆっくりと扉が開く。

「ほ……あ」

見ただけで思わず変な声が出た。

初めて入る生徒会室は、そうして感嘆の声を上げるに相応しいものだった。無味乾燥でそれこそ牢獄のような教室とは違う、言わば『高級そうな』雰囲気を持った場所である　と、感じた。

「よく来てくれたね。二年F組、真壁陸朗君」

「うえっ!？」

声のしたほうに振り向く。

そこにいたのは数々の噂から想像していたような、眼鏡をかけて詩集でも嗜みつつ、アフタヌーンティーを楽しむような完全無欠のお嬢様ではなく　窓際に置かれた大きな高級デスクの上に行儀悪く腰かける、金髪碧眼の美少女だった。きっちりと着込んだブレザーの襟元に結ばれたネクタイの色から、三年生であることがわかる。初対面の相手だ。しかし、それが誰であるかはすぐに思い当たった。

腰まであるふわふわした金髪と、サファイアの瞳、白磁の肌。日の光の中にあって、それにいささかも劣らぬほどの、まさしく輝く

ような美貌。

日本人離れた容姿を持つこんな美少女など、この学校には一人しかない。

「はじめまして、僕は秋月雪乃^{あきつきゆきの}。この学校の……生徒会長なんてものをやってる。ま、気軽に『雪乃ちゃん』とでも呼んでくれてかまわない」

「ゆ、雪乃ちゃんはちょっと……」

「いやいや、かしこまらなくて構わないよ。生徒会長なんて、そんな大したものじゃないんだ」

彼女はそう言って、悪戯っぽい笑みを浮かべた。

かしこまらなくていいと言われても、彼女を前にして緊張しない生徒などいない。色々な意味で、彼女は圧倒的すぎるのだ。同じ中学生だと思えないほどに。

「そうだ、立たせっぱなしじゃ悪いよね。そっちのソファにかけてくれるかい」

「あ、はい。じゃあ失礼して……」

促されるまま、部屋に置かれた応接セットに腰を下ろす。ぎしぎしと関節が音を立てそうなくらい、ぎこちない動きだった。

「固いなあ。そんな緊張しなくてもいいんだけど……コーヒーでも飲む？」

「コーヒーですか？」

「それとも、紅茶のほうがいいかな？」

「コ、コーヒーをお願いします！」

「はいよー」

生徒会長は頷くと、机から降りて部屋の片隅にある棚に向かった。私物だろうか、そこにあるのは外国製らしきステンレスのコーヒー・パーコレーターだ。

同じ棚から品のいいデザインのカップを取り出し、コーヒーを注ぐ。ふわりと漂う香ばしい匂いのおかげか、少しだけ心が落ち着いた気がした。

「お待たせ」

コーヒーと小さなミルクピッチャー、そして砂糖壺をテーブルに置いた生徒会長は、陸朗の向かいのソファに座る。一挙手一投足がいちいち優雅で、育ちの良さを感じさせる仕草だった。

陸朗は受け取ったコーヒーを喉の奥に流し込むふりをしつつ、生徒会長の様子をうかがう。

目の前では、彼女が砂糖壺から角砂糖を取り出すところだった。数は三個。ミルクもたっぷり入れていた。意外に甘党らしい。

しかしもちろん、知りたいのはそんなことではない。ないのだが、彼女は素知らぬ顔でカップの中身を緩やかに傾け、その味と香りを堪能していた。

「さて……と。わざわざ来てもらったんだ、こっちの理由から話るのがスジってもんだよね」

しばらくしてカップの中身が半分ほど減ったころ、生徒会長はようやくに本題に入るつもりになったようだった。

「とりあえずメールでは図書館利用についてと書いたんだけど……さて、キミに心当たりはあるかい？」

「……ないと、思います」

「ない？」

「少なくとも呼び出しを受けるようなことは、なにも」
「なるほど。図書館で放課後ゲームをプレイするのは別に悪くない、と」

「ええ」

昼休みからずっと考え続けたが、やはりゲームプレイぐらいで生徒会長に呼び出されるとは、どうしても思えなかった。

「要するに、『褒められたことではないが問題はない』くらいに思ってるってことか」

「そうですね、けど」

言葉を濁す。

そんな陸朗を、生徒会長を名乗る少女はまじまじと観察していた。正直居心地が悪い。品定めをされているようだ。

「うーん、僕の顔を伺うような言い方はやめたほうがいいね。悪いクセになるから。それより陸朗君、『ペルクラ』 いや、『ペルソナクライン』は楽しいかい？」
「……ッ！」

アプリの名前を出されて、少し驚く。が、知っていても当然だ。全部調べた上で、自分を呼び出したのだろうから。

「毎日プレイしているようだけど……どうかな？」

「正直、わからないです。習慣みたいなものだし……だから、強烈に面白いつて感じることはもうなくて……」

生徒会長はそう、と頷くと、形のよい顎の先を摘んで考えるようなそぶりを見せる。

「あの、そういう言い方するってことは、やっぱり学校でプレイするってのがマズかったんですか？ それとも、これからダメになるとか」

「いや、そんなことはないよ？ そもそも学校からゲームしてるの、キミだけじゃないし。ま、多くはないけどね」

「そ、そうですか」

じゃあなんで呼びつけたんだ、と喉元まで出そうになった言葉を飲み込む。

きつと、それをこれから説明しようというのだろう。陸朗は彼女が口を開くのを、辛抱強く待った。

「ぶつちやけた話をするね、別にキミに詰問やら注意やらをしようってつもりはないんだ。ここに呼んだのは……」

「呼んだのは？」

オウム返しに問い返すと、可憐な口元がさも愉快そうに笑みの形を作る。

「単なる興味本位さ。キミが習慣になるほどやり込んだ『ペルソナクライン』、その話を聞こうと思ってね」

「そ、それだけのことで!？」

「先に言っておくけど、もちろん公私混同だよ。でも、どうしてもキミに直接尋ねたかったからね。こういう機会を作らせてもらった」

「俺にですか？」

「そう、キミにだ」

そう言つと、生徒会長は陸朗の左手を優しく掴んだ。手首のリングから伸びる極薄の『掌装着型端末』を付けた左手を。

「な、なにを？」

「ちよつと借りるよ、キミのパムコンを」

「借りるって……」

答えるより先に、生徒会長は陸朗と同じように『掌装着型端末』を装着している左手を彼の掌に重ね合わせる。一瞬、ピリッと『掌装着型端末』に電気が走ったのを感じた。二人の間でクロード・ネットワークが繋がったのだ。

「少しデータを送るけどいいかい？ 大したサイズじゃないから、ストレージの容量は気にしないでいいよ」

「か、かまいませんけど」

生まれて初めて触る女の子の掌は、たてえようもなく柔らかかった。

陸朗がそのぬくもりにどきまぎしながら頷くと、すぐにホロ・モニタにアクセス許可の申請が出る。ウイルス・チェッカーを起動しつつ、それにOKと答えた。

流れてきたデータは、『思考空間』へのアクセスログだった。ざっと目を通すと、学校からVSへのアクセスを洗い出したものだということがわかる。

「一応説明すると、これは昨日の放課後、学校からVSへアクセスした記録だ。一般生徒の閲覧は禁止されているものだが……今だけは特別だよ？ それでだね、これにはもちろん陸朗君が図書館からアクセスしたのも入ってる。というか、ほとんどキミのばっかだね」

「あ……す、すみません！」

「別に謝らなくてもいいんだけど。で、これを調べるとキミが同じカテゴリの動画……『ペルクラ』のリプレイを繰り返し見ていた

ことがわかる。それも特定のものだけを数種類。なぜだい？」

「な、なぜって言われても。俺はちょっと、調べ物をしただけで」

昨日繰り返し見たリプレイといえば、あの『剣の魔女』に関連するものだけだ。たしかにあれから他のリプレイもダウンロードして見比べてみたが、陸朗の直感を補強するような材料はなかった。

陸朗にとってはその時点で、リプレイそのものについての興味は完結してしまっている。今さら「なぜ」と問われても、大して答えようはない。

「ふうん。調べ物、ね」

すつと、生徒会長が目を細めた。

「な、なにか……俺、まずいことしたんですか？」

「そういうわけじゃないんだが……キミがしていたことではなく、キミが見ていたものに興味がある。どうしてこのリプレイを見ようと思ったのか、それが知りたい」

「それは……」

どうしてそんなことに興味を抱くのか、まるでわからない。

しかしその青い瞳を真っ直ぐに向けられると、喋らずにはいられない気分になる。抗いがたい、無言の強制力があつた。

「昨日『ペルクラ』で戦った対戦相手の動きで、ちょっと」

「っていうと？」

興味津々といった様子で、生徒会長が話の続きをつながした。

「説明しても理解してもらえないかわかりませんが……動きに個人

のクセが出やすいんですよ、このアプリ。それで、加速や減速するタイミングの取り方とか、そういう数値で出てこない部分が気になつて」

「なんだい、相手がズルでもしてると思ったのかい？」

「そういう意味じゃなくて……ただ、前に見たことのある動きだったから」

「それでリプレイを調べた？」

「ええ。ある有名なプレイヤーの動きと、どうにも似てる気がしていやその確証とかはなくて、単なる俺の思い込みだったりするのかもしれないけど、そのときは似てるって感じた……か……」

身を乗り出すようにして話を聞く生徒会長の顔が、すぐ目の前にあった。重ねたままの左手がほんのりと汗ばんでいるのを感じる。

それが自分の汗なのか、それとも彼女のものなのかすらわからない。

「あ、あの」

「うん？」

「ちよつと、近いです……」

「そうかい？ 僕としてはもっと近づいてもいいんだけど」

口元に変わらぬ微笑みを浮かべたまま、生徒会長はすすつと音もなく陸朗に身を寄せる。長い金髪が揺れるとシャンプーのものだろうか、不思議な甘い匂いがした。

「いや、だから」

「そんなに嫌わなくてもいいじゃないか。大事な話は、ここからさ」
「は？」

左手にまた小さく電気の痛みが走る。

ホロ・モニタ内に、『思考空間』の最深層・情報球殻構造体へのアクセスが行われているアナウンスが表示された。外部から目の前にいる生徒会長から、自分の『知覚変換』が制御されようとし

ているのだ。しかし手を重ねられたまま、振り払うことすらできなかった。

陸朗はただただ混乱し、間抜けな声を上げるだけ。状況が把握できなかつた。

「え？ え！？」

「ありがとう、だいたい僕の推測通りだった。というわけで、キミをこのまま帰すわけにはいかなかったな」

「は、はいい？　なんで！？」

青い目が静かに陸朗を見上げていた。大きく澄んだ瞳に、動揺を隠せない自分の顔が映っている。

「さっきのデータ、よく見たのかい？　ダメだなあ、流しただけだろう。よく見てれば気付いたろうに……いいかい、あれには校内から『ペルクラ』で遊んでいた記録が載ってた　そう、『校内』だ。図書館だけじゃあない」

「俺以外の記録も載っていたと……？　でも、それが？」

「記録は二カ所。一ツは図書館、一ツは『ここ』だ。そして両者は同じ時間、同じフィールドに繋いでいた……つまり、どういうことだろうね？」

それは教師が生徒に質問を投げかけるような口調だった。挑発的な表情が、「まだ気付かないのか？」と問いかけている。

考えれば、答えはすぐ見つかった。

そういえば彼女はさっきから、ずっと『ペルソナクライズ』を略称で呼んでいる。まるでそのほうが言い慣れているかのよう。

ようやく気付いた。生徒会長が何を言おうとしているのか　いや、何者であるのかを。そして、陸朗自身に向けられた視線の意味を。

「俺と同じ時間に、誰かがこの部屋から『ペルクラ』をプレイしていた……いや、俺と対戦していた！ だったら、それって!?!」
「そう。キミが昨日戦っていた相手は……この僕さ」

にいつと、生徒会長の口元が魔女のように吊り上がる。

その瞬間、真下に向かって自分の中にある『なにか』 魂とか、そういう不定形のものが引きずり出されるような、大きな力を感じた。

陸朗はこの感覚をよく知っている。スフィアへ『知覚変換』するときに感じる『引力』だ。それはつまり、生徒会長による外部アクセスによって、自分の『掌装着型端末』が完全にその支配下に置かれたということだった。

同時にホロ・モニタ内で勝手にプログラム・ランチャーが起動し、システムが『ペルソナクライン』を起動させていた。もはや止めようはない。

視界はすでに現実から『思考空間』^{リアル}の映像へ変換され、世界は仮想現実へと切り替わっていた。ほどなくペルソナアバターが展開され、スフィアへと突入することになる。

見れば、目の前にいる生徒会長も自分と同じようにスフィアへと引き込まれつつあった。いや、違う。彼女に同調する形で、陸朗こそが引きずられているのだ。

「な、なんで『同調変換』^{バディ・リアクト}をつ!?!」

「ちょっと付き合ってもらつよ、ジェット・バレル。まだ、確かめたいことがあるからね」

1 - 4 秋月雪乃（後書き）

ヒロイン登場。

やっと登場人物二人目。

1 - 5 リベンジ・マッチ

リアクトにかかった時間は、ほんの一瞬だった。

深海の底を抜けるように、ある一点で引力から解放される。『知覚変換』によってアクセスするデータの海の最深層　情報圧縮による超高速処理空間である『スフィア』へと到達したのだ。

そこは世界を裏返したような空間だった。球状の情報境界面の内側に、ヴァーチャル・リアリティで再現された『世界』が張り付いている。上を見上げれば、青い空の代わりに反対側の大地が見えた。スフィアは『思考空間』内にいくつも存在するが、現実におけるメガシテイ単位でそれぞれが個々の球状世界として独立している。学校からアクセスできるのは、東京二十三区をモデルにした『トーキョー・スフィア』だ。

陸朗たちが今いるのは、そのうちのイケブクロ・エリアと呼ばれる区画だった。

彼にしてみれば、慣れ親しんだ場所ホームグラウンド。そして世界の文字通り裏側にある『もう一つの現実』だ。

「くっ……！？」

その『現実』に気づいたときには、もう自分も生徒会長も、ペルソナバターをその身にまとっていた。思考内デスクトップには、周囲にペルソナクライアントのバトルフィールドが展開されたことを示すシグナルが表示されている。

昨日、自分を一蹴したあのペルソナバター、ゴウト・ホーン。彼女が、自分のすぐ近くにいる。

当たり前だ。掌を重ねて行くバディ・リアクトで、彼女によってスフィアへと半強制的に連れてこられたのだから。

半ば混乱したまま繋がれていた手を振り払い、彼女から距離を取

った。

「……つれないなあ。女の子に、この仕打ちはないんじゃない？」
「あんたが……ゴウト・ホーンだったのか」

おどけたようなその言葉に、敗戦の記憶が甦る。

一本角のペルソナアバターを睨みつけると、彼女は困ったように肩をすくめた。

「なんでこんなことを？ 制裁でも加えようっていうんですか、昨日みたく？」

「うーん、ずいぶんくだらない質問をするね」

その言葉には、どこか揶揄するかのような響きがある。

「くだらない？」

「だってそうじゃないかな？ キミが僕に聞きたいのは、そんなどうでもいいようなことじゃないはずだ。違うかい？」

お前の考えなど、なにもかもわかっているぞ。そう言わんばかりの口ぶりに反感を覚える。

しかし、事実生徒会長の言う通りだった。彼女の目的など、知ったところでどうにもならない。なるようにしかならないだろう。むしろ今気になっているのは、彼女がゴウト・ホーンであったことと、その『正体』のほうなのだから。

だが陸朗には ジェット・バレルにはわかっている。彼の疑問に、ゴウト・ホーンが素直に答えることなどないことを。

「俺の質問になんか、答える気はないでしょう」

「まあね。けど、それもキミ次第だ。僕に言うこと、きかせてみな

よ。力尽くでもかまわない、できるものならね」

そう言って、含み笑いを漏らすゴウト・ホーンこと生徒会長。傲慢極まりない台詞だが、それを裏付けるだけの力を、彼女はたしかに持っていた。

「力尽く……ですか」

「そうさ。考えてもみなよ。ここは『ペルソナクライン』……そのバトルフィールドだろ？」

彼女の言うとおり、すでに『ペルソナクライン』が起動しているため、周囲は現実。生徒会室を再現した通常空間ではなく、元の空間データをベースとした専用のバトルフィールドへと切り替わっている。

状態は昨日と同じ廃墟。おそらくここへ引き込んだとき、生徒会長がわざとそう設定したのだろう。

「バトルフィールドに、ペルソナアバターが二人。とすれば、やることなんてひとつしかないじゃない」

「……昨日の続きをしようとも？」

「はっはっは。あれは僕の勝ちだよ、疑いようもなくね。こっちの傷は、この角だけだもん」

彼女　ゴウト・ホーンはそう言って、片方折れたままの角を指差した。

「もっともダミー・アバターとはいえ、僕にまともな攻撃を当てた奴は久しぶりだ。正直言って、ずいぶん驚いた」

「大した自信ですね、会長」

「会長はやめてほしいなあ。今の僕はゴウト・ホーンだよ、ジエツ

ト・バレル君」

上から目線が素なのか、挑発なのか判断がつかない。

昨日と違い、ボイスチェンジャーを通さない彼女本来の涼やかな声から、その内心を推し量ることは難しかった。

「結局、何をしようってんですか、あんたは？」

苛立ちがつのれば、いつまでも従順な『下級生』を取り繕っても
いられない。自然と言葉が荒くなった。

「続きじゃなくて、仕切り直しだね。負けを取り返したくないかい、
リベンジ・マッチさ、ジエツト・バレル。全力を出してみなよ。キ
ミの力は昨日みたいに、角一本分で終わりじゃないはずだ」

「……あれでも、精一杯やったつもりなんだけどな」

「精一杯……うん、精一杯か。たしかにそうかもしれない。けどね、
けどね……『その先』って、あるものだよ？ キミはそこまで使
っちゃいない」

「そんなの、あんたにわかるはずが……」

「わかるさ。なにせ僕はキミより強いからね。『その先』だって知
っている」

「……ッ……」

事実を事実であると突き付けられることは、ときに大きくプライ
ドを傷つけることがある。その事実を受け入れていたとしても、な
お。

「キミが望むなら、それを教えてあげることやぶさかじゃないけ
ど、どどどどどする？」

そのまま聞き流すには過ぎた言葉だった。彼女が　ゴウト・ホーンが強いことは認めている。だがことさらそれを鼻にかけ、その上「哀れなお前に恵んでやる」と言わんばかりの物言いには、さすがに我慢ならなかった。

「馬鹿に……してるのか？」

「怒ったかい？　僕の言葉に腹を立てたのかい？　じゃあ、やってみなよ。僕を地べたに叩き付けて、ひいひい言わせながらごめんなさいって謝らせてみたまえ。もちろんキミの持ちうるもの、すべてを使ってね。チートしたつてかまわないよ、ん？」

試すような口振りだった。だが、こうやってけん制してチートを封じようというつもりはないのだろう。いや、間違いなく彼女は心底「チートをして構わない」と思っている。

ジェット・バレルごとき、どうにでもできるという絶大なる自信おそらくそれは事実で、真実だ。しかしそこまで言うかと、そこまですの矜持に傷をつけるかと、怒りのボルテージがさらに加速する。

「……俺、あんたのこと嫌いになりそうだ。いや、嫌いだ、間違いなく！」

「それは困るな。僕はキミのことが好きになりそうなのに」「そっという台詞が……いちばんむかつくんだ！」

もはや敵意を隠すことはやめた。

吐き捨てるように言って、アイテムインベントリを開き、武器のデータをロードする。装備したのは、愛用のロング・ライフルだ。

勝てるかどうかなんて関係ない。とにかくこの腹が立つ女に一発ぶちこんでやらなければ、気がすまなかった。

「いいぜ、やってやるよ。リベンジ・マッチだ。昨日の借りを返し

「やる！」

「くっくっく。そうこなくっちゃ」

銃口を突き付けられても、ゴウト・ホーンの状態はまったく変わらない。余裕たっぷりひとしきり嘲笑すると、彼女はぱちりと指を弾いた。

虚空の一点で情報粒子が密度を増し、『シヤッ審判装置』が実体化する。

「時間は無制限、勝敗はダブルノックアウトによるドローなしのサドンデス。白黒はつきりつけるといふことでいいかな？」

「望むところだ」

「即答か。さすがに男の子だね、カッコいいじゃない。そこまで腹を決めてるんなら、ただの勝負じゃつまらないな……」

さつき初めて出会ったときに似た、悪戯っぽい口振りだった。仮面の奥では、さぞや悪辣な笑みでも浮かべているに違いない。

「つまらない？」

「つまらないさ。せつかく現実リアルの知り合い同士デュエルの対戦なんだ、勝ち星のやりとりだけじゃもつたいない。だから……ここはひとつ『賭け』でもしようじゃないか、ジェット・バレル」

「賭け……だと？」

また妙なことを言い出した。

ゴウト・ホーン いや、彼女が『秋月雪乃』であるときから、その言動はどこか突拍子がない。陸朗にとっては予想外のことはかりをやってくる。

手玉にとられているようで、面白くない。むしろはらわたが煮えくりかえっている。

だが、そうやって陸朗が腹を立てることさえ、彼女は計算尽くな

のだろう。重ね重ねの挑発は明らかにわざとだ。退けないところまで陸朗を追い込むことこそが、彼女の目的。

しかしそれに気付いたところで、今さら振り上げた拳を納めるつもりなどない。この高慢な女の鼻を明かしてやる。それだけを今、考えていた。

「……賭けるものは？」

「キミの身柄と、僕の身柄。勝った方は負けた方の言うことをひとつだけ、なんでも聞かなきゃいけない……なんてのはどうだい？」

「ずいぶん、ありがちな。個性派気取りのあんたらしくない条件だが」

「なーに、わかりやすい言葉にして、言質を取るだけだよ。結局はさっき言ったとおりさ。腕尽くで僕を屈服させてみな、ジェット・バレル」

「ああなるほど、それはわかりやすい！」

「その言葉、同意と見なしていいようだね。じゃあ……始めようか」

すつとゴウト・ホーンが腕を一振りすると、手の中にグレイヴが現れる。

『審判装置』が開始のシグナルを二人のホ口・モニタに送ったのは、それとまったく同時のことだった。

1・5 リベンジ・マッチ（後書き）

学生の頃、学校の視聴覚室にサターン持ち込んで、バーチャファイターやってたことを思い出します。

1 - 6 奇襲

奇襲。

リベンジ・マッチの立ち上がりは、その二文字から始まった。

「おおおっ!!」

咆哮しながら大地を蹴りつけ、低い姿勢でゴウト・ホーンへと突進するジェット・バレル。

陸朗のペルソナアバター『ジェット・バレル黒い銃身』はその名の通り、射撃戦を主体としたチューニングをされている。インファイト接近戦もこなせないことはないが、わざわざ不向きな距離を維持する必要はない。開幕と同時にけん制しながらバツクダッシュで距離を取るのが、通常の戦闘セオリーだ。

しかし彼は今、そのセオリーを破った。ロング・ライフルを槍のごとく構えての突撃。むろん、やぶれかぶれの単なるセオリー無視ではない。狙いは間合いを詰めての射撃だ。

ゴウト・ホーンに残る傷 アバターの象徴とも言えるその角を折ったのは、ごく至近距離からの一撃だった。無論本来は仮面破壊を狙っていたもの。ゴウト・ホーンがかわしたのは、さすがというほかない。

だがしかし、彼女をしてなお超至近距離では直撃を避けるので精一杯だったのだ。だからこそ角は折れた。突破口はそこにある。

避けきれないタイミングでの至近射撃 直撃を狙える可能性は、それ以外思いつかなかった。いや、これしかない。

開幕と同時の奇襲。この先彼女と何分戦うか、戦えるのかわからないが、間違いなくもっとも命中率が高いのは、今この瞬間になるはずだ。

状況、間合い、距離、そのすべてを揃えるチャンスは、そうめつたにあるものではないのだから。

開幕がミドルレンジで始まったのも幸運だった。懐に飛び込むまでにかかる時間はほんのわずか。ジェット・バレルが軽量高機動型のチューニングであることが、ここでプラスに働いた。

「詰めてくる！？ けどっ！」

「動き出す前に、撃ち抜くっ！」

昨日の戦いで、陸朗は学んだことがあった。

ゴウト・ホーンの機動力を支える特殊装備グライド・スピナーには、いくつか弱点がある。そのうちのひとつが上下方向に機動力を発揮できないということであり、そしてもうひとつが 車輪であるがゆえに、始動にわずかなラグがあるということだった。

『ペルソナクライン』というアプリケーションは、『知覚変換』^{リアル}技術を最大限に活用し、現実とほとんど区別がつかないほどの体験をプレイヤーに与える。だがそれゆえに、いくらでも現実から解き放たれる余地がありながら、あえて現実の物理法則による支配を許している面が存在するのだ。

甲高く耳に響くスキル音もそのひとつ。車輪であるグライド・スピナーは、急発進・急加速といった行動にグリップ力が追いつかず、空転させてしまうことがある。

前回の対戦で彼女が小刻みに動き続けていたのは、グライド・スピナーを静止させることを嫌ったに違いなかった。

グライド・スピナーは静止状態からでは始動がワントンポ遅れる。ほんのわずかな時間ではあるが、陸朗にとってはそれこそが数少ない勝機。だからこそ開幕からの奇襲だった。開幕時は静止状態

『ペルソナクライン』の対戦モードにおける不問律だ。そこそそを狙った。

「もらったあつ！」

走り込んだ姿勢のままライフルを構え、トリガーを引き絞る。狙いは一点、あの山羊の首を獲るのみだ。

ジェット・バレルのライフルには三点バースト　トリガーを一度引くと三連射される機能　はついていない。モードはフルオート連射のみとなる。しかし幾度も使い込んで慣れ親しんだこの銃ならば、指先の感覚だけで正確に望んだだけの弾数を撃ち込めるまでに習熟していた。

グリップに伝わる震動と共に、タタタツと短く発射音が鳴った。空を裂く三発の高速徹甲弾が、ゴウト・ホーンの首を撃ち貫かんと襲いかかる。

どれだけゴウト・ホーンが、その正体が達人であろうとも、無を有にすることは叶わない。ほんのわずかなタイミングの遅れは取り返しのつかない危機として、今まさに牙を剥こうとしている。

だがしかし、そこをこらえてこそその一流。ゼロを一にできないのならば、一以外の答えを探し、見つけだす。それができるから一流なのだ。

「せい……やつ！」

グライド・スピナーは頼れない。ならばと彼女が選んだのは縦の動き。しかし、ただの跳躍では銃弾を避けきれはらずはなく　グレイヴを使い棒高跳びポールポルトの要領で、彼女はその身を宙へと躍らせる。

「そう避けるか、避けやがったか！」

「……っ!？」

「逃げるのならば、上しかないよな！」

しめた、まんまと、予想通りに、ゴウト・ホーンが動いてくれた。

陸朗が仮面の下で笑みを浮かべる。避けられたら玉砕する気で突っ込んだつもりはない。こうなる可能性は、二手三手の先のことは当然のように読んでいた。

ジェット・バレルの装甲が展開し、無数のマイクロミサイルを空に向かつてバラ撒かれる。昨日の反省をふまえた多弾頭ミサイルが彼の頭上で炸裂し、あたかも花火のように空を飾った。

初撃の奇襲が当たれば良し、避けられるのもまた織り込み済み。そして『点』で避けられるなら、『面』で攻める。それが陸朗の出した結論だった。

そして爆煙に包まれるゴウト・ホーン。だが減ったライフ・ポイントのはんのわずかだ。あの板バネのような装甲パーツは、想定以上に防御力が高いらしい。

「堅牢だな、ちくしょう！」

拡散弾頭ミサイル程度ではこの程度か　すぐさま頭を切り換えて、打つべき次の手を探す。ホロ・モニタ内でアイテムインベントリを展開すると、新しい武器のデータをロードした。

それはレンガを二つ重ねたほどの大きさをした、金属製の武骨な箱だ。同じ形のものはいくつもジェット・バレルの前方に実体化し、ゴトゴトと音を立てながら、扇形の壁のように積み上がっていく。ちょうど、ゴウト・ホーンの子想着地点を取り囲むような格好になる。

「やるね、奇襲そのものさえ陽動に使うとは！」

「まだ終わってないぞ、ゴウト・ホーン！」

「へっ!?　なっ、これは……クヴァートライト・ミネ指向性散弾地雷ッ!？」

「正解ッ！」

ゴウト・ホーンが着地した瞬間を狙い澄まし、無線で指向性散弾

地雷を起爆する。地雷の信管が一斉に点火され、金属製の箱に収められた内包物　ひとつあたり七百個にも及ぶ、直径一・二ミリの超合金ベアリング弾が炸裂する。

着地したゴウト・ホーンに全弾が集中するよう、適切に配置された地雷の数は四十個にも及ぶ。単純計算で三万発近いベアリング弾が、横殴りの豪雨のように獲物へと襲いかかった。

硬い板バネ装甲を撃ち抜く耳障りな金属音が、悲鳴のようにバートルフィールドに響く。断続的に黄色い輝きがきらめくのは、金属が削り取られたときに飛んだ火花か。

文字通り雨霰と降り注ぐ無数の超合金弾の猛威に曝されては、さすがのゴウト・ホーンも堪え忍ぶほかはない。完全に足が止まっていた。

「……もう一撃いつ！」

散弾であるがゆえに威力はそこまで高くないが、いかんせん数が数だ。弾雨を浴びて確実に減っていく、ゴウト・ホーンのライフ・ポイント。だがここで攻手を緩めるほど、陸朗は思い上がってはいない。

ロング・ライフルを手放すと、新しい武器を両手に呼び出す。

それはグリップとサイト、肩当てのついた、金属製の円筒だった。だいたいジェット・バレルの身長と比べると、半分強の長さがある。分類上、『無反動砲』と呼ばれる武器だ。それを両手に一本ずつ構えるジェット・バレル。

「いつけえっ！！」

グリップをしっかりと握り込みトリガーを引いた瞬間、強烈な爆風を金属筒の後方より噴出しながら、砲弾が発射される。

弾種は成型炸薬弾。爆轟波によって発生する液化化金属の超高速

メタルジ

噴流によって、重装甲さえも侵徹することが可能な弾頭だ。

ジェット・バレルが発射したものは多目的榴弾と呼ばれ、ベアリングやワイヤーを内蔵することで加害範囲を広げた、『面』と『点』の攻撃を併せ持つもの。誘導性能はまったくなく、完全に相手の動きを止めたときに備えて陸朗が用意した、切り札とも言える武器だった。

飛翔する弾頭が着弾する。その瞬間、彼女の身体がぐらりと傾いたように見えた。しかしそれを確かめる暇もなく、土ごと標的を吹き飛ばして盛大な爆風が巻き起こり、ゴウト・ホーンの姿を完全に覆い隠してしまう。

「当たった！ いや、でも、これは……！」

爆風の向こうを睨みつけながら、肩にずしりとのしかかっていた無反動砲を、苛立たしげに投げ捨てる。

コンソールに表示されているゴウト・ホーンの残りライフ・ポイントが五割弱。これだけの好機に、あれだけの攻撃を叩き込んで半分までしか追い込めなかった。

仮面の下で唇を噛む。悔しさは隠せない。

「嘘だろ……こんなに撃ち込んで倒せないとか、なんなんだよ……！」

アバターの本質的なポテンシャルが違いすぎるのだ。それが大きなダメージ補正となって現れている。

アバターランクの差は、『ペルソナクライン』のあらゆる『原則』に補正をかける。本来これだけの連続攻撃は、ジェット・バレルがこれまで戦ってきたような同ランクの相手どころか、相当に格上の相手でもオーバークイルになるダメージだ。

しかし真の強者　さらなる上位ランカーとのまともな対戦経験

に乏しい陸朗は、ランク差によるダメージ補正がどれほどのものかというのを、実感として持っていない。それゆえゴウト・ホーンを見誤り、倒しきれなかったのだ。

やがて爆風が晴れる。ゆらりと幽鬼のように、ゴウト・ホーンが身を起こした。

強靱だった板バネ装甲も、拡散弾頭ミサイルと指向性散弾地雷、そして無反動砲による攻撃を立て続けに受けて細かくヒビが入り、見る影もなくボロボロになっている。見た目からしてダメージがなかったわけではないのだろうが、陸朗は倒すつもりでやったのだ。それなのにフィールドに立っているその姿からは、格の差というものを思い知らされている気がした。

「くそ！」

「そこまで悔しがることはないよ。最後の榴弾なんて、ホントにヤバかった。なんとか体をかわしたけど、直撃をもらったらさすがに危なかったよ」

「ちょ、直撃しなかったのか……！」

無数の散弾地雷の猛威にさらされた直後でなお、とっさの回避行動に移れる冷静な判断力と果敢な行動力。それこそが彼女の経験のたまものであり、強さだ。陸朗には、ジェット・バレルにはないものだ。

「しかし驚いたよ。やれば出来る子だとは思ってたが、まさか一気呵成にここまで追い込まれるとはね。油断したとか、甘く見たとかは言い訳だし、失礼になるか……」

ゴウト・ホーンの肩が震えている。怒りではない。彼女は笑っていた。

「ふふふ……たった一日でこれか、一度戦っただけでここまで対応するか、この僕に。すごいよ陸朗君、キミは僕の想像以上だ。本当にすごい……」

陸朗を讃える彼女の言葉に、嫌味のようなマイナスの感情は一切感じられない。彼女は心の底から感激し、賞賛していた。

身体を震わせるたびに、ダミー・アバターの装甲にヒビが広がっていく。ヒビのあいだから漏れ出るのは、炎のようなオーラだ。

「ほら、見てくれよ陸朗君。ダミー・アバターはもう限界だ。キミがやったんだぞ？ キミは今の連続攻撃で、このゴウト・ホーンをこうまで追い込んだ。ボロボロだよ、ゴウト・ホーンはもう戦えない。情報構造が戦闘機動に耐えられないんだ、自壊してしまうだろう……」

聞きよつたようでは、敗北宣言にもとれる。

だが違う、喜色の混じる彼女の声には、まだ確固たる自信が満ちている。敗北など、欠片たりと認めていない響きがある。

「こういう形でお披露目ストリップするとは、思っていなかったけど……『ごほうび』だ、ジェット・バレル。キミが一番知りたかったであろうことを、教えてあげよう」

「じ、ごほうび？」

「重くてのろいダミー・アバターはもうやめつてごとき。ここから先は……全力全開だッ!!」

バキンと大きな音を立てて、ダミー・アバターが崩れ落ちる。ただの情報デブリと化した板バネ装甲が風に溶け、内部に隠されていた『正体』をさらけ出した。

それはゴウト・ホーンよりも一回りほど小さい、女性型のペルソ

ナアバターだった。鮮烈なまでのオペラピンクにきらめく、ドレスの優美さと剣の鋭利さをあわせ持つ刃状装甲。まるで『秋月雪乃』の髪そのものであるかのような、風にたなびく黄金の放熱索。顔に装着している、切れ長のアイ・カメラを持つ装甲と同色の仮面。

そんな優美で伶俐な本体とは不釣り合いなほど武骨な大剣を携えて立つ、威風堂々たるその姿は、見る者すべてを圧倒するほどの存在がある。

このアバターが何者であるかなど、いちいち考える必要もなかった。彼女は、間違いなく、

「キミの直感^{ストレージ}は間違っちゃいなかったよ、ジェット・バレル。僕が……『剣の魔女』だ」

1 - 6 奇襲（後書き）

ここまで来るのに結構かかりました。

1 - 7 魔女

予想はしていた。予感があった。

けれども……実物を前にしてなお、『剣の魔女』という伝説のアーバターがそこにいることを信じられなかった。

なんだこれは。こいつは、なんだ？ 本当に実在しているのか？ 自分はなにを見ているんだ？ 『知覚変換』の誤動作すら疑った。しかしどこにも異常はなく 魔女は確かにそこにいた。

『ペルソナクライン』のコンソールにアクセスして、対戦相手のデータ呼び出す。ネーム・エントリー部分には、はっきりと『剣の魔女』というアバターネームが書かれていた、本人に間違いはない。だがそれ以上に陸朗の目を惹いたのは、彼女の対戦成績の欄だった。

五桁もある対戦数と勝利数はカウンターストップ つまりすべてが『9』で埋まっていて、逆に敗北数はゼロ。シングルマッチにおける敗戦が、ただの一度もないということだ。噂通りの……いや、噂以上の強さ。もはやひたすらに感嘆するほかはない。

「どっちもカンスト以上の数値ではあるんだけど、勝利数のほうが実際にはちょっとだけ少ないよ。タイムアップでドローに持ち込まれたことは、それなりにあるからね」

ジェット・バレルの様子から、なにを調べているのかを察したストレーガが、そう補足する。

しかし引き分けの数が、彼女の不完全さを意味するとは思えない。むしろ時間切れに持ち込んだ相手を褒めるべきだろう。

「さて、そろそろいいかな？」

「え？」

陸朗の間の抜けた返事を聞かされると、ストレーガは困ったように小首を傾げた。

「え、じゃないよ。装甲拘束具を破棄しただけで、僕のライフ・ポイントはまだ半分残ってる。勝負はついちやいないんだ。最初に決めただろ、この対戦はタイムアップもドローもないサドンデス。キミが負けるか、僕が勝つまで終わることはない」

「それを言うなら……あんたが負けるか、だろっ」

「はっはっは、僕が負けるわけじゃないか」

「……その高慢な台詞に、ひとつことも言い返せないのがむかつくな」

「言い返されないだけの努力はしたからね。そうやってがむしゃらに上へ上と登り続けて……気付いたら、周りには誰もいなかった。敵も、味方も」

いつも凜然とした彼女らしくない、寂しそうな声色が、その言葉には混じっていた。

陸朗とて木石ではない。強いこと、それ自体が彼女にとってひとつの心の傷になっているのだと察した。

「だから名を変え、姿を変えて？」

「いや、そっちは無関係。また別件だよ。なに、僕にも色々事情があるってことさ。いい女には秘密が多いってね」

「峰不二子みたいなことを」

「尊敬してる」

ふざけた答え、だがたしかに似合う。彼女がもう少し成長すれば、きつとあんなふうに男を手玉に取る美女になるに違いない。

いや、むしろもう手玉に取っているかもしれない。たとえば

陸朗とか。

「……言っておくけど、対戦でキミをからかっているつもりはないよ。油断こそしたが、手抜きはしていない。ゴウト・ホーンを破棄する羽目になったのも、単にキミの戦力を過小評価した僕のあやまちだ」

じろり、と金色に輝くアイ・カメラが動いた。どこかその目付きが険しくなったように思えるのは、彼女の仮面がソリッドな形状をしているからだけではないだろう。

「正直言って、キミをゴウト・ホーンのまままで倒しきるつもりだった。そこからじっくり話を始めようと思ったんだ。しかしキミはキミ自身の力で、僕の正体を暴いてしまった。それほど力を持つペルソナアバターだったとは、少し僕の予想を超えていた……これならば、と思ったね」

「……？」

「気にしなくていいよ。言つたら、僕には僕の事情がある。だからキミが今、理解しなきゃいけないことはただひとつ。僕からは逃げられないってことだけだ」

「本当に……大した自信だな」

かがみ込んで、無反動砲を撃つとき投げ捨てたライフルを拾い上げ、構える。

彼女は逃がさないと叫びたが、今さら逃げる気もない。怖じ気づくような段階はとっくに過ぎたのだ。

「……またそのライフルか。お気に入りなのかい」

「気に入ってはいるけど、武器に大してこだわりなんてない。今必要だから使っただけだ、あんたを仕留めるためにな」

「仕留める、ときたか。大きく出たねえ。けど、できるかな？　まだ、ライフ・ポイントはたった半分減っただけだよ？」
「もう半分、減らせばいいだけだ」

数字の上ではそうだが、それがいかに困難なことであるか。もちろん陸朗にもよくわかってている。減らず口を叩いたのは、彼女から受けるプレッシャーに押し潰されないようにするためだ。

さっきゴウト・ホーンを追い込めたのは、奇襲から連続攻撃が奇跡的に上手く機能したからに過ぎない。同じことをやっても、奇跡は二回も起こらないだろう。

さいわいにして用意していた策はあれだけではないが、それが通じるかどうかというのは良くて五分五分だろうと陸朗はみていた。

「平面移動に特化していたゴウト・ホーンの弱点を突く作戦は見事だった。しかし優秀なキミのことだ。ゴウト・ホーンのみを想定した装備と作戦では、今の僕に通じないことには気付いてるだろう？」

頷くほかはない。

「あっさりと認めるね。理解しているのならば、それ以外の策も用意してあるということか。なら、遠慮はいらないかな」

ストレーガの声色が変わった。杖代わりに地面に突き立てていた大剣を引き抜くと、左手にそれをだらりとぶら下げないように構える。

「では続きを始めようか、陸朗君……いや、ジェット・バレル。どこからでもかかってきなよ、僕は逃げも隠れもしない」

その言葉に、なにひとつ嘘も偽りもなかった。

ストレーガは一步も動かない。ただ自然体でそこに立っているだ

けだ。

しかし、

「……ッ！」

ジェット・バレルは動けなかった。

計算も、作戦もすべて吹き飛んだ。

魔女の前に立つただけで感じる、凄まじい威圧感。一步でも動けばどこにいようと斬られる、そんなふうにはさえ思えた。

剣という武器を用いる以上、射程距離は短いはずだ。グライド・スピナーを持つゴウト・ホーン以上であろうスピードも予想はつく。それでも相手の間合いがどこまで広いのか、見切ることができない。

「く、くそっ……！」

「ふふっ、どうしたのかな？ そんなところにいたら、斬ってくださいと言わんばかりだよ？」

魔女があざ笑うように、小さく肩を揺らした。しかし、それに激昂することさえ、今の状況は許されないのだ。

わかってしまった。わずかでも動いた瞬間、自分はその大剣の鋒になると。どんな抵抗、どんな計略、どんな覚悟があろうとも、その一切合切を叩き斬り、粉碎する。あれはそういう存在なのだ、それほどまでに実力差があるのだと、本能的に理解していた。

シングルマッチにおける敗戦はただのひとつもなし さつき記録を見たときには信じられなかったが、今こそ実感した。こんな相手に勝てる者が、『ペルソナクライズ』にいるなんて想像すらできない。

甘く見ているつもりなど微塵もない。だがそれでもなお、見誤っていたのだろう。

さつきまでの戦いは あんなものは、彼女にすればまるで本気

ではなかったのだ。機動力で相手をかき回すことなど、彼女にすれば持てる力のほんの一部でしかない。動かなくても相手を制し、斬ることができるのだから。

真の強者は動じない。それは些事に心を動かされないというだけではない。強者は状況を支配し、弱者の動きを自在に操る。

(……ここまで差があるのかよ！)

ライフルを持つ指先が震えた。恐怖というよりも、悔しさで。

ああ、やっぱり天辺はこんなにも遠かったのかと　そんなことを今、考えていた。

「そりゃあ遠いよ。キミと僕とじゃ努力の純度が違うもの」

「心を読んだみたいなた台詞を……！」

「一流はね、相手の心だつて読めるのさ」

「あんたが言うのと途端に胡散臭いな」

「ははっ、ひどいなあ」

台詞は軽いが、彼女のまとう剣呑な気配が濃さを増していく。

「ふうむ、どうやら動きづらいと見えるね。うかつに動いたらカウンターで終わる、と気付く時点で大したものだが……このままじゃ僕が面白くない。ちょっと遊びに付き合ってもらおうか？」

「えっ……！？」

ぶわっと、大きく風が巻いた。ほんのわずかに目を閉じていたあいだに、魔女の姿はかき消えていた。

「こつちだよ、ジェット・バレル。しっかりしたまえ」

「……ッ……！」

背後に悪寒。切っ先から感じる殺意にも似たエネルギーが、背中全体を撫でるように冒しているのを感じた。

圧倒的不利な状況で、圧倒的強者から送られる殺気。それがこれほど恐ろしいものであるのかと、初めて理解した。

「きつ、斬りたきゃ斬れよツ！俺に勝って、それこそ通報でもなんでも、すりゃあいいだろツ!？」

「……何でそんな話に？　っていうか、ヤケになるのはよくないよ?」

「この状況でどうしろって言うんだよ……!」

詰んでいる。そう判断するのも無理はなかった。ここからのような行動を取っても、ほんのわずかな踏み込みで、ストレージはたやすくジェット・バレルを串刺しにできるのだから。

しかし当の『魔女』自身は、そんな陸朗の言葉を聞くと意外そうに首を傾げた。

「そうかい？　いやあ、まだまだ僕にはスキがあると思うけどね。

別に君をナメているわけじゃないが、こうやってわざわざ話をするあたりにさ」

「……ッ!」

確かにこんな会話はスキ以外の何ものでもない。だが、スキが“できた”ではない。スキを作り、これ見よがしに見せているのだ。

悪辣とさえ言えるやり口だった。これが『魔女』の名の由来かと思っほど」。

「まあ、ここで諦めるのもまた良し。僕の見込み違いだったと、反省することでしょう。だが……まさかジェット・バレルともあろう

者が、この程度の苦況ピンチで諦めてしまつとは言つまいね?」

仕掛けてこい。

要するに、彼女はそう言っているのだ。

この状態で、この後ろを取られた敗北必至の状態で、自分に抗つてみせろと言いつつ放った。

本来なら後ろを取つた瞬間に剣を突き刺し、ゲームオーバーだったのだろう。だが何の気まぐれか、彼女は自分にチャンスを与えたのだ。

(……口でなんと言おうとも、これはバカにされてるよな……っ！)

『魔女』の誘いに乗るのも悔しいが、この最後のチャンスを投げてしまつのはもつとバカだ。相手がわざわざ機会をくれたというのなら、それを利用して吠え面をかかせてやればいい。

今の陸朗でも、そのくらいのポジティブ思考はできるのだ。いや、そうとでも考えなければ、あまりにも自分がみじめだった。

だがどうする。最初の一手をしくじれば、待っているのは無様な敗北だ。彼女が与えた慈悲はこの思考時間のみ。ジェット・バレルが動きを見せた瞬間、『魔女』は手にした剣で彼を容赦なく突き刺すことだろう。

つまり要求されているのは 剣をかくぐり、相手の動きを止め、速やかに反撃に移行する そんな行動だ。しかし、それがやすやすとできるなら、そもそも彼女に背後など取られはしない。要するに、無理難題というわけだ。

(けど、やる。可能性は……これしかないッ!)

躊躇はしなかった。思考内デスクトップでそのコマンドを実行すると、ジェット・バレルの暗灰色の装甲に、光で彩られたヒビが走

る。

「アーマー・パージでッ!!」

「……ッッ!!」

昨日、ダミー・アバターだったとはいえ彼女に一矢報いたのはこれだ。そしてこの土壇場で彼が取り得る手段は、もはやこれしかなかった。

しかし、

「やはりそれか！ そう来たか！ そうだろう！ 今のキミには、それしかないッ!!」

この行動すら、ストレーガは読んでいた。『アーマー・パージ』による爆発と閃光の目眩まし。それを使うと彼女は読んでいた。

だからこそ視界を奪われたこの状態でも、いささかも動揺することなく前へと踏み込み、迷わず剣を突き出した。

ガキンッと金属音が響く。だが、そこにあつたのはジェット・バレルではない。身代わりのように地面に突き立てられた、彼のロング・ライフルだ。彼の姿はかき消えていた。

「^{デュイン}囷ッ！ 武器を手放し、間合いを取ったか！ だが……!!」

「間合いなんか取っちゃいない。てめえから逃げられるなんて思っ
てないッ!!」

「何ッ!？」

声は、頭上からした。

「上だと!? 距離を離さなかったのか!？」

アーマー・パージが生み出した、ほんのわずかなチャンス。その少ない時間でジェット・バレルが退避先として選んだのは、あろう

ことが敵であるストレーガの上空だった。それも彼女に手が届くほどの、低い空間だ。

やけになって飛んだわけではない。たとえストレーガの視界を奪おうとも、躊躇なく突き込んでくるのは彼にも分かっていた。だからこそ、だ。

普段の状態なら、ストレーガが自分の頭上にいる相手を迎撃するなどたやすいことだ。しかし剣を突くために踏み込み、前のめりになった姿勢では、上　それもやや後背寄りの空間は死角となる。

もちろん、ストレーガの戦闘速度をもつてすれば、生まれる隙などほんの一瞬。文字通りの瞬間でしかない。

賭けるにはあまりにも短い刹那の時。しかしジェット・バレルは、陸朗はその瞬間に賭けた。否、賭けるしかなかった。

ただ一つきりのチャンス。無駄にはできない。

「届けッ！」

「しまった、肩をッ!？」

落下を利用して、ストレーガの両肩を押さえ込む。これで剣を上　に振るうことはできない。関節の構造上の問題だ。そして取り回しの悪い大剣では、持ち替えてジェット・バレルを刺すことも難しい。

『魔女』に生まれた一瞬の隙が、ここで決定的な失策へと変わる。最後の一手　彼女の後背を突くべきは、捨ててしまったライフ　ルではない。そして頼れぬ己の徒手空拳でもない。

機体に仕込まれたマイクロミサイル。普段はけん制にしか使わな　いこの武器が、今は最後の武器となる。

「これでッ!」

前方宙返りしながらストレーガの背後に降りると、素早く組み付　いた。

細い見た目からは想像も出来ないほどのパワーを誇るストレーガを押さえ込むのは、上背で勝るとはいえ、華奢とさえ言える砲撃戦タイプのジェット・バレルには荷が勝ちすぎる。だがそれでも、必死に彼女にしがみつき、その動きを抑える。

「このままミサイルでッ!!」

「なっ……正気!?!」

「相打ち上等だ! 間合いを開けたらあんたは避けるだろッ!!」
「くッ……!!」

確信があつた。わずかでも動く隙間があれば、この『剣の魔女』ストレーガは避ける。それだけの技量の持ち主であると、この一瞬の交錯で理解できた。

常識ではあり得ないことを為す『超人』。最高位ランカーとは、『ザ・オーバーロード』の一角とは、そういうものだと思ひに染みて分かつた。ならば非力非才な自分を取り得る手など、選べるほどに多くない。自爆覚悟 いや、組み付いたままミサイルを爆発させるなど、これは自爆そのものだ。

「これならあんたでも、逃げられないはずだッ!」

「くく……はははっ、さすがは僕が見込んだ男の子! やってくれる! けどそんな覚悟じゃあ……まだまだ僕には届かないな!!」
「なら試してやるッ! 吹っ飛べよ、『剣の魔女』ッ!!」

火器管制プログラムから、ミサイルを選択。プログラムを起動すれば、発射されるはずだった。

「組み付くという発想は良かったが……どうせなら、肩を押さえた時にそのまま上半身を抱え込むべきだった!」

「え?」

ぞくりと背中冷たいものが走った。手を離せと、恐怖が命じる。だが男の意地が、プライドが、その両腕を動かさなかった。その瞬間。

「腕が少しでも動くな、キミを弾き飛ばすなどわけはない。やはりキミには……地力が足りないのさッ!!」
「があッ!?!」

アバターの腹に凄まじい衝撃が走り、身体がくの字に折れ曲がる。ハンマーで殴られたような いや、トラックがぶつかってきたような、理不尽で暴力的な衝撃が、ジェット・バレルの身体を後方へと吹き飛ばした。

柄頭だ。剣の柄頭を、ジェット・バレルの腹に彼女は叩きこんだのだ。常識外れのパワーとスピードによって。

見れば死ぬ気で組み付いたはずの腕が、彼女に絡み付いたままもぎ取られ、肘から先がなくなっている。ただの一撃で、彼女はジェット・バレルの 陸朗の、男の意地さえ断ち切っていた。

決定的な敗北。そうとしか言いようがない。ジェット・バレルは万有引力に導かれるまま地面へと落下すると、そのまま二、三度無様に地べたを転がった。

「う……ウソだろ……こんな、これほどまでにッ」

「これが壁だよ、ジェット・バレル。絶体絶命を乗り越える者だけが、上の世界へいけるんだ」

剣をだらりとぶら下げたまま、ゆっくりとストレーガが近付いてくる。淡々としたその台詞は、勝ち誇るでもなく、哀れむでもなく。仮面の下にある表情を読ませない、静かで諭すような口調だった。

「僕の勝ちかな」

「ああ」

両腕を失った以上、勝ち目は完全になくなった。

事ここに至っては、悪態も悪あがきもしたくなかった。素直に勝者を賞賛し、自らの敗北を潔く受け入れることだけが、彼に残された最後の誇りだ。

「うーん、何かもう手はないのかな？ チートとかで」

「……ねえよ。あつても使わない」

「どうして？ 勝ちたくないのかい？ 悔しくないのかい？ 手段を選ばず勝ってきたのがキミだろう？」

「それは……」

勝ちたいに決まっている。悔しいに決まっている。だが彼はその言葉を飲み込んでしまった。

他の相手ならば、負けが込んだ時は卑劣なチートで叩きのめしてきた。それを当たり前のように受け入れていた。

だが彼女は違う。チートのような小細工を使ったところで、勝てる気などまるでしない。それどころか、今よりも手ひどい負け方をしそうだ。よしんば勝てたとしても、そんな勝利にどれほど意味があることか。

燦然と輝く勝利を積み重ねてきた存在がここにいる。あまりにも眩しいその存在の前には、『チートしてでも勝った方が強い』とうそぶくことすら虚しくなった。

だからこそ、彼は今、素直に敗北を受け入れたのだ。どれほど悔しくて、だ。

「何を考えているかはわかるよ。その悔しさは、忘れない方がいい」
「……ふん。こんなの、たかがゲームだろ？」

「よく言つよ。隠せてないね、悔しさを。だけど悔しくて当たり前さ」

『剣の魔女』の声は、優しかった。ただひたすらに。おもわずハッと顔を上げた。

魔女のオペラ色の仮面の奥で、機械仕掛けの目がじっと彼女を見つめている。

吸い込まれるようだった。ジェット・バレルは、陸朗は、彼女から目を逸らすことができない。

そして彼女は、静かに言った。

「……あのね、陸朗君。負けたら悔しくて当たり前だよ。ここが仮想現実の世界だからとかって、関係ない。だって、僕らがやり取りしてるのはただのデジタルデータじゃなくて……僕らのプライドなんだから」

1 - 7 魔女（後書き）

書きため分はこれで最後です。
以降はのんびり更新します。

2 - 1 代価

それから何があったのか、どうやって家に帰ったのか、陸朗は覚えてはいなかった。

一度生徒会室に戻ったのは確かだから、そこで生徒会長と何かを話したような気もする。しかしどんな話をしたかなど、まったく完全に覚えていなかった。

夢を見ていたのではないか、という気がする。だが『ペルソナクライン』を簡易起動してみれば、そこには間違いなく対戦相手として『剣の魔女』の名があった。

(夢じゃあ、ない)

あの戦い　と呼べるか微妙なものだが　は、確かに現実だったのだろう。手も足も出なかった、あの動き、あの脅威。目を閉じればリプレイ動画よりも鮮烈に思い出すことができる。

しかし、良い経験をした　などと、達観できるほど陸朗は老成はしていない。あんな逆立ちしても勝てないような相手であっても、負ければ悔しい気持ちに先に立つ。

正直言って、気分が悪い。見下されたわけではないが、自分が敗者というみじめな立場であるのは変わらないのだ。

「だったら、忘れよう……ってわけにも、いかないんだよなあ」

勝てない相手のことなど、忘れてしまふに限る。頭ではそれを理解していたが、素直に領けない自分がいた。

彼女の言葉が引っかかっている。

「その悔しさを、忘れるな」

彼女は ストレーガはそう言った。
だが忘れずに、どうしろというのか。

悔しさを糧にできるのは、選ばれた一部の人間だけだ。自分のような凡俗は、くすぶる想いを抱えて悶々としているしかない。

強くはなれないのだ。彼女 生徒会長、秋月雪乃のように。

「僕が、どうかしたのかい？」

「うおおっ!？」

気がつくと、目の前に美少女の顔があった。昨日見知った顔だ。

「せ、せえとかいちよお!？」

「んー、固いねえガチガチだねえ。肩書きじゃなくて、もっと気さくに呼んで欲しいな、僕は秋月雪乃だぜ？ 覚えるのに難しい名前じゃないだろ？」

「いや、その」

すつと耳元に口を寄せられて、そんな風に囁かれると、ドギマギしてしまう。

こういうシチュエーションは、孤独 そう、孤独な青春の時を過ごしている陸朗にとって、ついで経験したことのないもの。どう対応しているのか、どんな態度を取ればいいのか分からない。

助けを求めるように もっとも、助けてくれるような友人は陸朗にはいないのだが クラスメイトたちへと顔を向ける。

「う……」

自分に向けられている奇異の視線に、ようやく気がついた。奇異だけではない、嫉妬も混じっていた。刺すような視線だ。

当然だろう。陸朗だって、この金髪の少女が持つ声望については十分知っている。雲上人だと思っていたくらいには。

そんな生徒会長が、冴えないただの下級生。それも、クラスの鼻つまみ者だ。と親しげに話している。クラスメートたちにとつて、これはもはや一つの事件だった。それも、極めて許し難い方向での。

クラスメートに距離を置かれるのは慣れているが、敵視されるのは困る。大いに困る。リアルでは、波風立てずに生きたい。嫉妬するのもしられるのも御免だ。

傍らの生徒会長を睨みつけるが、彼女はにやにやとした人の悪い笑みを浮かべて意に介さない。全てを分かかっていてやっているのだ、この女は。

「くっ……!!」

「あっ、陸朗君!？」

これ以上、教室にはいられない、いたくない。陸朗は早足で教室を飛び出した。

背後で教室の中がざわめくのが聞こえる。振り返る気はなかった。陰口ならいくら言われても平気だが、さすがに耳にするのは好ましくない。当たり前だ、好き好んで嫌味や悪口を聞きたい者など、どこにいるものか。

(それもこれも……)

あの、生徒会長のせいだ。

リアルでの生活に、土足で踏み込んでくるようなこの仕打ち。許し難いものがあった。

リアルでの。この学校における彼女は間違いなく権力者。気に入らないからといって、そういう『力』を嬉々として振るうタイプ

でないことは十分察するが、陸朗のような者からすれば、彼女が奔放に振る舞うだけで十分な脅威なのだ。

「待つてよ陸朗君。待てつてば」

いつの間にか、張本人が隣を歩いていった。けっこうな早足で歩いているはずだが、しつかりと男の早足についてきている。無言で足を速めても、まったく意味がない、健脚だった。こんなことまでスキがないのか、しれっとした顔で普通に歩いているように見えるのが、余計に腹立たしい。

ついてくるな、と大声でわめきたくなるのを堪えて、ひたすら廊下を歩く。

「おいおい、どこまで行くんだい？」

「どこだつていいでしょう」

「よくない、困るよ。僕は用事があつて、キミに会いに来たんだからさ。昼休みが終わっちゃうよ」

「用事？」

ほんの少しだけ、歩く速度を緩める。

考えてみれば当たり前だった。彼女は暇人ではない。むしろこの学校内では、もっとも忙しい部類に入る生徒だろう。適当な理由で、わざわざ下級生の教室に顔を出すような存在ではないのだ。

忙しい中時間を割いた。その事実気付くと、少しばかりバツが悪くなった。相手の都合ではある。だがそこまでするのならば、その理由くらいは確かめてもいいだろう。

陸朗は足を止めると、大きくため息をつきながら、聞いた。

「……なんの用なんですか？」

「うーん、ここではちよつとね」

そう言って、生徒会長は困ったように笑った。

昼休みの廊下だ、人通りが多い。

しかもさすがは知らぬ者のいない生徒会長、道行く生徒たちがひっきりなしに挨拶してくるため、まとまった話もできない。

「誰かに聞かせて楽しい話をする気もないしね。場所を変えようか？」

一緒に来い。

彼女は目だけでそう言うと、踵を返して歩き始めた。

食料を補給しようと促され、購買に寄った後、生徒会長に連れて来られたのは、やはりというか、予想通りというか、彼女の根城とも言うべき部屋だった。

生徒会室　まるで数十年前の少女小説から切り取ったかのような、アンティークなたたずまいを持つその部屋に入ると、二人は向かい合ってソファに腰を下ろした。

「やっぱりここですか」

「ここなら、邪魔は入らないからね」

「生徒会のほかの面子は？」

「来ないよ。あらかじめ言っておいたし」

つまり、最初から陸朗を生徒会室に連れ込む気だったということだ。

「もっとも、仕事以外でここには近づく気はないんじゃないかな」

「？」

まるで、自分が嫌われているような口振りだ。

誰からも一目置かれる、最強の生徒会長らしからぬ物言いに、陸朗は首を傾げる。

「別に嫌われてるわけじゃないよ。少なくとも僕はそう思ってる。ただね、僕は『みんなのアイドル』だからさ。どうしてもってところはある、キヨリの」

それ以上、彼女は言葉を重ねようとはしなかった。

色々と思うところはあるらしいが、口にしたら負けとも思っているのかもしれない。

「じゃあ、俺もかしこまった方がいいですかね？」

「……キミは分かっているという事を言うんだから、底意地が悪いよね」

「生まれつきなもので」

「かわいくないの」

玉子サンドをほおばりながら、心底嫌そうに眉をしかめる。

「男にかわいさを期待するのは間違っているでしょう」

「えー？ だって年下じゃんキミ。別におかしい話じゃないよね？」

「男に同意を求めてください。言われて嬉しい言葉じゃないし」

「なんだ、キミもやっぱりそーゆートコは男の子なんだ」

「かわいって言われて男が喜ぶのは、幼稚園児までですよ」

「言うねえ、男の子」

そう言って、ケタケタと笑う。よほど日頃の娯楽に飢えているの

だろうか。

彼女の「こういうところが、実に苦手だ。

「……で、俺を嘲笑うために、こんなところまで連れて来たんですか？」

「おっと、そうだった。たまに男の子と食事なんてしたから、すっかり忘れてた」

「……」

「何か言いたげだけど、聞いてあげない」

しれつと言いつつ、彼女は椅子に座り直し、まっすぐに陸朗の方へと向き直った。

蒼い瞳から放たれるのは、まるで相手を射貫くような鋭い視線。思わず息を呑んだ。真面目な話をしようとしているのが、馬鹿にでも分かる。また皮肉の一つでも言っただろうかと思っていたが、その気がどこかに飛んで失せてしまう。

彼女は少なくとも陸朗の前ではおちゃらけているクセに、時折こうして妙に鋭い表情を作るのだ。どちらが本当の彼女なのか。そんな詮無い考えが頭に浮かぶ。

「む。僕の話をちゃんと聞いてるか、陸朗君？」

「あ……す、すいません」

「まったく……もっかい言うよ。昨日の勝負のこと、覚えているかい？」

「そりゃ、覚えてます、けど……」

言葉尻が、しどろもどろになる。

昨日の勝負は結局負けた。敗北を認めた瞬間から、どうやって決着したかはよく覚えていないが、ちらっとログを見たらアバターが頭から真っ二つになっていたので、おそらくはまたしても一刀両断

されたのだろう。

「そう。勝負は僕の勝ちで、キミの負け。それはいいかな？」

「……そのくらいの潔さは、あるつもりですよ」

「素晴らしい。負けをばかす奴は、強くなれないよ。負けず嫌いとして負けを認めないのは、全然違うことだからね」

「それは経験則ですか？」

そう尋ねると、可愛らしく小首を傾げながら、生徒会長はわずかに考えるような仕草を見せた。

「どちらかというと、観察結果だね。だってほら、僕は負けたことってあんまりないからさ」

「あんまり？」

異なことを言う、と思った。

十万戦以上もデュエルを繰り返して、黒星はただの一つもなし。無敵というのも生やさしい、文字通り電脳世界最強のペルソナマスタ―が口にするような台詞ではなかった。

「そりゃシングルでは無敗だよ。それは僕の誇りさ。でも……タッグマッチで負けたことは、いくらもあるからね」

理屈としては理解できる。だが、信じがたいのは変わらなかった。もしかして、ハンデ代わりにすごく弱い相手とタッグを組んでいたのだろうか？

「足を引っ張られていた、ということではないね。むしろ……おそろく……足を引っ張っていたのは、僕だ」

「……冗談でしょう？」

「他人がどう思い、どう見ているかは分からない。でも、当事者である僕は、そうだったと考えているよ。息が合ってなかったのは間違いないね、だから負けたのさ」

淡々と語るその言葉の裏に、隠しきれない悔しさが滲んでいる。始めて見せるその表情、だがそれも一瞬の事。剥き出しになりかけた感情はすぐになりを潜め、いつも通りの、人好きのする明朗快活な彼女に戻っていた。

「ま、昔のことはどうでもいいんだ。雪乃ちゃん大失敗の巻とか、キミに聞かせたかったわけじゃないし。問題は、これからの話さ。僕と、キミのね」

「これから？ これからって、何です？」

「とぼけてるのかい？ いや、キミはそんなに器用じゃないし、素で忘れてるのかな？」

「忘れてるって言われても……」

「よく思い出してよ。約束したよね？ あの勝負、負けた方が勝った方の言うことを聞くって」

「そ、そう言えば……」

売り言葉に買い言葉。ノリと勢いで、そんな約束をしてしまった気がする。

頭に血が上っていたとはいえ、格の違いなど分かっていたはず。馬鹿な約束をしたものと、今さら後悔しても、すでに遅かった。

「……要求は？」

「いや、そんな冷酷非道の悪魔を見るような顔はやめてほしいんだけど」

どのツラを下げてもそれを言うのか。

ため息をつきつつも、その口元が愉快そうにつり上がっているのは隠せない。

「言っとくけど、キミが負けたのが悪いからね」

「くっ……！ し、しかし！」

「もちろん、僕は最初から勝つつもりで賭けをもちかけたことは、お察しのとおりではある。でも、そんな僕の絶対の自信を崩すために、キミは僕に挑んだんだろう？」

そう。彼女は最初から勝つことを前提にして、陸朗を賭けに誘った。そして何よりも腹が立つのは、雪乃がそれを微塵も隠そうとしていなかったことだ。

自分が勝って当たり前前だけど、それでもお前は賭けに乗るのか？ そんな敵をナメた態度で挑まれて、黙っていられるほど陸朗はお人好しではない。

その鼻っ柱をへし折ってやる。そう意気込んで、あの有様だ。プライドもへつたくれもない。完敗だった。その敗北を認めさせた上で、彼女はさらに要求するという。

つくづく　つくづく、最悪な性格の女だ。そこまでして自分を弄んで、この上自分に何をさせようというのか。

「そんなに悔しそうな顔するなよう。ダメダメ、ちゃんと言うこと、聞いてもらうからね」

「分かりましたよ。それで、俺に何をさせたいんです？」

逆らっても無駄というのは分かっている。いかにして被害を減らすかが、今の最優先事項だ。マスト・ファクター

「ん。まあ、最初から決めてたんだよね、実は」

「……よく分からねーけど、俺にできることにしてくださいよ？」

「なあに、できるできる。簡単なことさ。身構える必要はない」

一ミリも信頼できそうにない、軽薄な言葉だった。

しかし今の陸朗に、それを理由にして拒む権利はない。負けは負けだ、そこは認めた。賭けに破れたのだ。ならばそれをうやむやにしないのが、なけなしのプライドというやつだった。

もっとも、ある種の安心感があった。

彼女は裕福な家庭に生まれた掛け値なしのお嬢様だ。金や物をせがまれるようなことはないだろうと確信があったし、生徒会長という立場的に、生徒一人に個人的な恥をかかせるようなこともするまいと予想していた。

おそらく、たぶん、きつと 彼女の要求は、現実^{リアル}についてのことではない。『思考空間』内での、それも『ペルソナクライン』での頼みに違いない そんな自分の読み通りになるか、否か。

わずかに手足を緊張させながら、陸朗は彼女の次の言葉を待った。

「キミに求めることはたった一つ」

ピアニストと見まごうような繊細で綺麗な指をくると回し、まっすぐ陸朗を指差す。

たっぷりと三秒タメを作ってから、彼女は 生徒会長・秋月雪乃は、傲岸不遜に、一切の拒否を許さない決然たる態度で、陸朗にこう宣告した。

「僕のものになれ、真壁陸朗。僕には、キミが必要だ」

2 - 1 代価（後書き）

長いプロローグが終わり、ようやく話が動き始めます。

最初から書き直そうかだいぶ悩んだのですが、とりあえず最後まで書いてから修正しようかと。

そっいうわけで今シバラクお付き合い下さい。

2 - 2 上層区画

そして放課後。

『思考空間』に展開された『ペルソナ・クライン』のゲーム・エリアの片隅で、ジェット・バレルとなった陸朗が、壁に身体を預けながらぼんやりと立っていた。

人待ちだ。もちろん、誰を待っているかなど、言うまでもない。

「はいはい、おまたせー！ 待ったかい？」

「少しばかり」

空間がたわみ、目にするのは二回目となる伝説のアバター、ストレーガが姿を現した。

「おいおい、そこは「僕も今来たところだよ、マイハニー」とかさ
ラリと流すところじゃないかい？」

「呼ばれたんですか、マイハニーって？」

「……いやごめん、僕が悪かった」

呼ばれたところを想像したのだろう。

秋月雪乃ことストレーガは、げんなりとした様子でこめかみのあたりを抑えてかぶりを振った。

彼女のアバターは今、オペラピンクの刃状装甲ドレスの上から、
ダークグレーのフード付きマントを羽織っている。

妙に地味な色のマントであるあたり、どうやら正体を隠している
つもりらしい。

「その格好は？」

「キミに壊されたダミー・アバター、修復してないんだよ。もう要

らないけどね、キミがいるから」

「はあ」

「……覇気がないねえ。しっかりしてよ、男の子だろ？」

「セクシャルなハラスメントですよそれ」

「おまけにパワハラもつけてあげようか？」

「あんたが言つとシャレになってません」

その気になれば、陸朗本人はおろか、彼の親を路頭に迷わせるくらいは簡単にやってのけるだろう。

秋月の長女というのは、それくらいのビッグネームなのだ。学生である陸朗ですら知っているレベルの。

(しかし……)

マントを風になびかせて歩くストレーガについて行きながら、周囲に視線を走らせる。

見慣れたはずのイケブクロ・エリアの光景。しかし、いつも一人で歩いていたこの場所が、少し違って見える。

どこに連れて行かれるのか、陸朗は聞かされていない。尋ねるタイミングは、すでに逸していた。それに必要ならば、向こうから説明をしているだろう。しないということは、黙ってついてきて欲しいということなのだ。

「……どうしたもんかな」

「何か言ったかい？」

「いえ、別に」

フードを被った頭が、もぞつと動いた。後ろを振り向いたようだが、フードに邪魔をされてこちらが見えず、諦めて前を向き直したらしい。

「心配しなくてもいい。もうすぐ着くよ」

足を止めると、彼女は二十メートルほど先にある、大きな建物を指差した。長さが不揃いな円柱を無数に束ねたような、天にそびえる巨塔。

それが何であるか、陸朗にも覚えがあった。

「『セントラル・エリアポーター
統合転送機構』です……よね？」

「さすがに知ってるか」

「そりゃ知ってます。もつとも、あまり近付きませんが。こういう『上層区画』への入り口って、俺には縁がないですし」

「縁がない、か。だろうね」

二人が今歩いてきたのは、現実リアルでいうところの都道四四一号線、俗に『立教通り』とか『要町通り』と呼ばれている道だった。

その道を要町方面から歩いて十数分ほどで着いたこの場所が、池袋駅西口。『スフィア』における『セントラル・エリアポーター
統合転送機構』だ。

「つて、まさか『上層区画』に行くんですか？」

「そだよ。あ、切符ポータル・パス買ってね切符。クレジットある？ ないなら貸すけど」

「いえ、それは大丈夫ですが……そもそも俺、ランカーじゃないから『上層区画』入れませんよ？」

『上層区画』とは、スフィアにおける中枢管理領域にもっと近い、情動的に安定した状態にある領域を指す。『ペルソナクライン』をプレイしているアバターから見ると、球状世界として構築されたスフィアの中心に浮かんでいる、多層構造物として存在していた。

その『上層区画』へ入るためには、一つだけ条件がある。

対戦勝利によって獲得できるアバターポイントが一定値以上ある『ランカー』以外は、入場ゲートで弾かれてしまうのだ。これは建前上は初心者を保護するための制約だが、誰もその建前を信じてはいない。

事実上、『上層区画』でのプレイは一定以上の実力を持つ存在への特典である。そういう認識がまかり通っていた。

ジェット・バレルがホームとしているスピット・ダンプのようなフィールドでは、このアバターポイントがほとんど溜まらない。

ゆえに実力はさておき、公のランキングにおいてジェット・バレルというアバターは、『上層区画』へ侵入する資格を持たなかったのだ。

「その辺は大丈夫。僕とパートナー登録したろ？ めかりはないさ」

「けど……上つて、そんな、急に言われても」

「そういう反応を予想していたからね、面倒だし黙ってた。でもついてきてもらうよ、これも賭けの負け金の内だと思ってね」

「わ、わかりましたよ……ここまで来て、今さら帰るとか言いませんよ」

賭けの結果、今のジェット・バレルはその身分を『魔女』の所有物に甘んじている。無論望んではないし納得もしていないが、賭けの結果を反故にするほど、陸朗の性根は腐っていない。

おまけに互いに現実リアルを知っているのだ。逃げ場はない。ならば負けは負け、よほど無体なことではなければ従うのが得策だろうと、彼はこの状況に折り合いをつけていた。

渋々ながら『クレジット 電腦通貨』を取り出し、バスタード・ベンダー 券売機で切符を買う。けれどもやっぱり気乗りはしない、とてもしない。

トーキョー・スフィアの中核部に浮遊している『上層区画』は、陸朗にしてみれば近付きたくないし、近付いてはいけなないし、近付くことは許されなない、そんな場所だった。

理由はひとえに、彼が『不正改変者』^{チーター}であるためだ。

名うて、『不正改変者』としてはそう言ってもいい陸朗だが、それゆえに敵も少なくない。怨みを買っている自覚もある。正体を隠したストレーガと戦ったとき、狙われた理由をそこに求めたくらいには。

『ペルソナクライン』のゲームシステム上、スフィアの大部分に設定された『通常戦域』^{ニユートラル・フィールド}では、戦闘拒否設定にしておけば対戦モードに入ることはないので身の安全を確保できるが、『上層区画』^{デューエル}ではそうはいかない。

『上層区画』での設定は『戦闘拒否不可能』^{戦闘拒否不可能}、夜討ち朝駆け罪に問わずなバトルロイヤルモードの仕様になっている。そんなところに陸朗 ジェット・バレルのような身の上でノコノコと姿をさらすのは、彼の感覚からすれば論外もいいところだった。

「気休めだけど、俺もそういうの被っておこう」

アイテムイベントリからポンチョ状の野戦コートをロードし、身にまとう。自分でカスタマイズしたアイテムなので、ちょっとした追加機能を付与してあるが、今は使用する必要はないのでそのまま羽織った。

そんなジェット・バレルの様子を、じつとストレーガが見つめていた。

「何か？」

「コートか……もったいないな、せっかく細身でカッコいいアバターなのに隠しちゃうのは」

「そんなこと言われても。『戦闘拒否不能戦域』^{アンリミテッド・フィールド}を、何も対策しないで歩くってのは考えられないでしょ」

「警戒しすぎじゃない？ 男らしくない、堂々としなよー？」

「……どのツラ下げてそれを言うんだあんたは……」

自分だってフードで正体を隠してるくせに、そんなことを言われる筋合いはない。

「冗談だつてば。怒りっぱいね、キミは」

「誰のせいだと思ってるんだよ!？」

「あとで牛乳と煮干しを奢っちゃおう、うん」

「人の話を聞け!」

しかしさらつとスルーされてしまった。だいたいそんなもの奢ってもらっても困るのだが。

そうやってイライラしてるうちに、『統合転送機構』の中央部にあるポータルエレベーション・ドライバの前に到着していた。

「んじゃ行こうか? ドライバの使い方は知ってる?」

「そのくらいは。パスをロードしながら、ドア横のスクヤナに掌合わせればいいんですよね?」

目の前にそびえる巨大な円柱を見上げながら答える。

縦方向の交通機関であるポータルエレベーション・ドライバを使うのは初めてだが、要するにこれはエレベーターのようなものだ。乗って、上に飛ばされて、『上層区画』に到着する。それだけの機構だ。

先にスクヤナに触れた彼女の続いて、インベントリからさつき購入した切符を^{ポータル・バス}ロードし、読み取り口へと重ね合わせると、円柱の一角が空気の抜けるような音と共に開いた。

「そうそう。よし、乗るよ」
「……あの」

ストレーガがドアの中に煌めく光の奔流に身を委ねようとした瞬間、陸朗は ジェット・バレルは、足を止める。

ここから先は、陸朗にとって初体験のエリアとなる。思うところがあった。

怖じ気づいたわけではない。だが、少しばかりは覚悟を決める必要がある。そのためには、こんな曖昧な気持ちでは無理だ。

「ん、何だい？」

彼女が振り向くのを待つ。

そのまま行ってしまう素振りがあれば、掴んでも止めるつもりだったが、その必要はなかったようだ。

『魔女』はマントの裾を軽く翻しながら、彼の方へと向き直る。

「……やっぱり、よく分からないままってのは、性に合わないんですよ」

「どづいことだい？」

約束は約束、だが知るべきことは知っておきたい。そのくらいの権利は、主張しておきたい。出会ってからこつち、彼女には主導権を握られっぱなしだ。それが少しばかり、面白くなかった。

「俺みたいなのは、本来こんなところに近づく機会も必要もない。というか、近付きたくない。そのあたりは、会長も知ってるはずでしょう」

「うん、そうだね」

「じゃあ何故なんです？　そういう俺の立場とかを無視してでも、

連れて行きたい理由ってのは？」

「ふむ、つまり連れて行かれるにしても、納得しておきたいということかな？ ……気持ちには分かるけどね、理由を知ったら約束を反故にされそうだしねえ」

見下されている、という感じではなかった。

どちらかという自分の無茶が分かってて、不安になっているように見える。

「どんだけ無体なことさせるつもりですか、あんたは？」

「いや、そこまでの事態にはならないと思うけど……万が一はあるかも」

彼女はそう言って、ちらりとジェット・バレルの顔をうかがう。どうやら、確約しなければ話は進みそうにない。

彼女のような人間に目をつけられたのが運の尽きだったと諦め、ジェット・バレルは首を縦に動かした。

それを見ると、彼女はつるりとしたカウル状のペルソナに手をやり、困っているかのように、その表面に軽く爪を立てた。上手い説明を思いつかない、とでも言いたげな仕草だ。

「結局、どういう理由なんです？」

「……ま、大したこっちゃないんだ」

その声色は、わざとらしく軽薄を装っていて、ひどく信頼できないような台詞に思える。それでも陸朗は辛抱強く、彼女の次の言葉を待った。

そして。

「まずはキミにも、見てもらおうと思っただ。僕の……『敵』って

やつをね」

「敵……?」

聞いた言葉を繰り返す陸朗。

だがもつ、彼女はそれに答えようとはしない。静かに踵を返すと、エレベーション・ドライバのシャフトの中へと、身を躍らせる。

結局、望んだ答えを得られないまま、陸朗は彼女を追いかけるほかなかった。

「ごうん、と鈍い音が身体の奥から響く。

気がつけば、ジェット・バレルの身体が、エレベーション・ドライバのシャフトから外に出ていた。

「う……」

わずかな吐き気。スフィアにいる限り、実際にこみ上げるものなどありはしないが、思わず口元を抑える。

「わ……! 大丈夫かい!？」

「ああ、いえ、少し気分が悪くなっただけで……すぐ治します、から」

トラフィック・エラーによる転送酔いだろうか、地上でポータルを利用するときは、こんなことはなかったのに。

頭を振って、無理矢理吐き気を押さえ込むと、周囲の光景が目に入った。

「あの、ここは……?」

「ここは『上層区画』のイントランスさ。『ペルソナクライン』内での呼び方は、『シユールニヤ・ガーデン』だね」

スファイア本体と空間的に切り離されているのだろう。不自然なほどに広大な空間が、どこまでも続いていた。ただし空は見えない。空の代わりにあるのは、無数のブロック状の構造物だ。ランダムに積み上げられた幾何学的なオブジェが、何層にも積み重なっている。天井と地面、どちらも同じデザインだった。まるで異形のビルの群れに、上下から押し挟まれているようだ。

「当たらずとも遠からずだね。あのうちの幾つかは本拠地として、中堅以上のアライアンスが使っているはずだよ」

アライアンスというのは、『ペルソナクライン』におけるアバターたちの共同体、いわゆるギルドやクランといったものに相当するシステムだ。

『ペルソナクライン』はゲームデザイン上、デュエル一対一の決闘を重視した設計になっているが、Co-op大人数での共同戦闘行為が不可能なわけではない。

そして多対多の戦闘を円滑に運営するべく、アバター同士が連帯することをサポートするためのシステムが、アライアンスだった。

ちなみに、陸朗はアライアンスには入っていない。彼が主な活動場所に使っていた『スピット・ダンプ』にもいくつかアライアンスはあったが、彼は独り身を好んだ。その方が身軽でいい、という判断からだった。

もちろん、アライアンスに関してうとい、というわけではない。むしろその逆だ。群れないからこそ、敵となる『群れ』の動向については、常にアンテナを張り巡らせている。そういう情報収集は、彼にとって日常だった。

(そういえば……)

『ストレーガ剣の魔女』がどこかのアライアンスに入っていた、という話は聞いたことがない。

アライアンスについてに限らず、パーソナルデータ 突き詰めれば目撃情報がほかの有名アバターに比べて圧倒的に少ないのは、彼女の大きな特徴だった。

そもそも『剣の魔女』は、陸朗も見ていたあのリプレイが『思考空間』で共有されたことにより、知名度が一気に広まったアバターだ。

いかなる理由か、もともとアバター・ランキングにおいてほとんどのパーソナルデータがマスクされていたので、リプレイ公開までほとんど都市伝説に近い扱いをされていた。徹底して己の正体を隠すというのが、少なくとも一線にいた頃の魔女のやり方だった。

しかしランキング上位者というのは彼女のような特殊な例外を除き、自己顕示欲旺盛な傾向がある。トーキョー・スフィア最大のアライアンスである『エンプレス・オーダー白銀騎士団』を率いるリーダー、『エンプレス・オブ・クローム聖銀の女皇』など、自分たちの勢力を誇るかのような行動がとくに多いことで有名だ。

「アライアンスか……」

ふと、そう呟いたストレーガの言葉には、どこか苦い雰囲気があった。

「誰かに合わせるのどうも苦手だね。アライアンスもいい記憶があんまりないよ、おかげで今は無所属さ」

この言い方だと、彼女もかつてアライアンスに所属していたこと

があるように聞こえる。

追放にでもあったのだろうか？ だとしたら、きつと所属していたとき、他人の迷惑を顧みないわがまま放題をやらかしたに違いない。

「なんだい、その生ぬるい視線は？」

「いえ、別に」

それより と言いかけて、ゆっくりとあたりを見回す。

初めて見る場所だが、想像とは少しばかり違っていた。もっと、上位ランカーがあちこちにたむろしているような、そんな空間を想像していたのだが、彼自身とストレーガ以外のアバターの姿は見当たらない。

しん、とまるで死んだように静まり返っている。

「静かですね」

「そりゃ、今日は貸し切りだから。人が少ないんだよ」
「貸し切り？」

誰がだろうか。

まさか、この『剣の魔女』がそんなことをするとは思えない。

もちろん彼女は仮にも現役最高ランクのアバターだ。しばらく身を隠していたとはいえ、本来の人脈は相当なものだろうし、その気になればどんなことでも実現してしまいそうなイメージはある。

だが、自分を連れてくるためだけに『上層区画』を貸し切りにするなど、さすがにあり得ない。

「どういうことです？ 誰がここを貸し切りに？ 何のために？」

「えらくクエスチョンマークが多い台詞だね」

「はぐらかさずに」

「……今日はここでパーティがあるのさ。まったく、バトルロイヤル上等の『アンリミテッド・フィールド戦闘拒否不能戦域』で壮行会とは、思い上がりも甚だしんじゃないか。ねえ？」

同意を求められても困る。

「話がまったく見えてこないんですけど」

「パーティがあるんだよって、言ったじゃない」

「いや、だから誰がパーティを開くんです？」

ストレーガは仮面の下で、わずかに目をしかめたようだった。視覚補正用のシールド・コンタクトが、不愉快そうに細められている。何か口にしたくないことを、我慢しているのだろう。わずかの後、渋々といった様子で彼女はこう答えた。

「……これからここで開かれるのはね、三大アライアンスの一つ、

『エンプレス・オーダー白銀騎士団』の出陣式だよ」

「はあ、なるほど……って、はいいい!？」

「変な声出さないですよ。パーティだよパーティ、そんな驚くことないでしょうが」

「いや、そこじゃないです! 『白銀騎士団』って!？」

「……イタバシ、ネリマ、ナカノ、シンジユクの四エリアを支配する、トーキョー・スフィア最大最強のアライアンスだよ。さすがに知らないとは思わないけど？」

「分かってる! 俺が言いたいのはそのじゃない!」

「じゃあ、何？」

「……あんたは、『白銀騎士団』相手に何をやるつもりなんだよ!？」

ようやく、聞きたかった質問に辿り着いた気がした。

巨大アライアンスが施設貸し切りで開くパーティ。それがこれから行われようとしている。

そこに乗り込んだ、無関係で部外者で招かれざる客の『剣の魔女』。この状況で何もしない いや、何もしでかさないわけがない。そして『統合転送機構』で彼女が漏らした、『敵』という一言。これだけ揃えば、何が目的かなんて馬鹿でも分かる。

「ひどいなあ、ジェット・バレル。僕がまるでよからぬことでも企てるような口振りじゃないか、そりゃ」

いかにも心外です、と言わんばかりに肩をすくめる。しかし、たった数日間の付き合いではあっても、彼女がどういう人間性の持ち主かは、だいぶ分かってきた。口で何と言おうと、微塵も信用できるものではない。

「……違うんですか？」

「あつたりまえだろ。信用ないなあ、僕」

「さつき下で言ってたことは？」

「……確かに、ここには僕の『敵』がいる。けど、それだけさ。闇討ちしようだなんて、考えちゃいないよ」

「なら、なんでここに？」

「決まってる。参加しに来たんだよ、パーティにね」

その台詞にはどこを切り取っても真実が含まれていない そんな風にしか思えない、胡散臭い言葉だった。

2・2 上層区画（後書き）

自分で書いておいてなんだけど、ヒロインの行動が実に大雑把だw
どんぶりヒロインと名付けたい。
ちなみにおっぱいもどんぶり並です。

「ああ、ちなみに……もう帰ろうと思っても、キミ一人じゃ帰れないからね」

「はえ？」

さすがに付き合いきれない、陸朗がそう考えたのを見透かしたように、ストレーガが告げる。仮面の奥では、その口元が悪辣につり上がっているに違いない。

「僕のパートナー権限で入ってるんだ、出る時も僕が一緒じゃないと出られないよ。何のために認証があると思ってるのさ」

「なにいつ!？」

「ログアウトしてもここに出ちゃうよ。あとあと面倒なことになるから、あんま変なことほしくないようにね」

『上層区画』のセキュリティは固い。そういう点でも、『ペルソナクライン』の開発者が、この空間に対し特別な価値を付加しようと考えていることが分かる。

一通りゲームを遊んだユーザーが辿り着く、いわゆるエンド・コンテンツにおいてステータス的な活用ができるよう、最初から想定してあるのだろう。事実、『ペルソナクライン』ではかなりの数の高ランク専用コンテンツが、この『上層区画』に用意されている。

その結果、この場所はトップランカーを数多く抱えている、『白銀騎士団』を含めた大規模アライアンスによる共同支配が行われることとなったのだ。

そのため陸朗のような“下々の者”は、『上層区画』の実情などほとんど知らない。いや、知りたくもない、と言った方が正解か。

無論言うまでもなく、そこに渦巻く感情は『嫉妬』だ。「あいつ

らだけ上手くやりやがって」 そんな風に思っている。格差社会とそのひずみは、『思考空間』の中にすら存在するのだ。

しかし本来ならばそんな『嫉妬』を一身に受ける存在であるストレーガは、他人の負の情念など高らかに笑い飛ばすような、圧倒的に豪快な性格の持ち主だった。

もしかして、こうでないと『上』には行けないのではないかと、思わせるものがある。自分とはオーラのようなものが違うなあ、などと陸朗は思ってしまったのだ。本人に言う調子に乗りそうなので、口にすることはないが。

「どうかしたかい？」

「ああいえ、別に」

まじまじと見ていたせいで気づかれてしまった。慌てて顔を動かし、視線をよそへと向ける。

果ての分からない無機質な風景は、平衡感覚でも麻痺させる効果があるのだろうか。少し、頭がくらくらした。

「……で、どうよ、感想は？ 初めてなんだよね？」

「ええまあ、何というか……意外と殺風景なところですね。これって、処理を軽くするために？」

「いやあ……設計者の趣味じゃないかな。地上はほら、バトル・フィールドの処理を重ねなければ、現実リアルそっくりなわけだろ。それに比べると、こっちは完全な架空の施設だからね。現実味を出しても面白くないってとこじゃない？」

「なるほど」

死んだような雰囲気ビル街だが、言われてみれば神殿のような、そんなある種の神々しさを感じなくもない。だとすれば、さしずめここは文字通りの『天上界』だろうか。

「それでも普段はもつと、人がいるかな。でっかいライアンスは、大抵交代で配下を駐屯させてるし。規模は様々だけどね」

「今日は『白銀騎士団』の貸し切りだからってことですか」

「いえす、ざつっらい。ただその分、騎士団連中の警戒は厳しくなってると思うよ」

「何故です？」

「簡単だよ、テロるのに都合がいいからさ。いかに騎士団がでかくても、この『上層区画』すべてにくまなく警備を配置するのは不可能だ。普段なら大手ライアンス同士が互いに監視しあうことで、頭数と死角を補っている。けれども、それが今はいない。隙だらけさ」

「……大丈夫なんですか、それで？」

「だから言つたる、思いつてるってね。自分は何者にも傷つけられない、そう確信してるんだ。その名のごとく女王様気取りなんだよ、『エンプレス・オブ・クロム聖銀の女皇』は」

吐き捨てるような強い語勢に、隠しきれない嫌悪が滲んでいる。

傲慢、というならストレーガ自身も相当なものだが、それは棚に上げているようだ。いや、あるいは同族嫌悪なのかもしれない。大組織の長である女皇に比べたら、取り巻きを持たない彼女は、さしずめ裸の王様といった感じだが。

「僕の裸がどうしたって？」

「うえっ!?!」

「キミ、時々考えてることがだだ洩れになってるから、気をつけた方がいいよ」

「は、はあ」

別にやましいことを考えていたわけではないが、思わず恐縮して

しまつ。

「もっとも、年頃の男の子だもんね。興味があるのはしょうがないよ。僕もそういうの、理解がないわけじゃないし」

「いや、違くてですね……」

「隠さなくていいって。僕は全然気にしてないから」

ひどい誤解だった。

「さて、いつまでも立ち話しててもしょうがない。そろそろ行くところか」

「どこへです？」

「もちろんパーティー会場だよ。中央にある大広間でやってるはずさ」

彼女はそう言って、ばさりとマントを羽織り直すと、ゆっくり歩き始めた。追いかけながらその背中に向かって、さっきから気になっていたことを尋ねてみる。

「あの、会長」

「ああ、そうそう。その会長ってのやめてね。ここは学校じゃないんだしさ。僕とキミはただのプレイヤー同士だよ、会長も生徒もないだろ、つか、下手したら現実リアルが割れる」

「じゃあ、なんて呼べば？」

「アバターの名前で……『ストレージ剣の魔女』と呼べばいいよ」

「わかりました会長」

「……おい」

一瞬、すさまじい殺気がジェット・バレルの全身を突き刺した。

「じよ、冗談ですよ、ストレーガ」
「まったく……」

ため息をひとつつく彼女。だが、さっきの怒気は本物だった。軽い冗談のつもりだったが、あれほどの怒りを見せるとは想定外だ。どうやら、彼女は現実と『リアル』を切り離すことに、強いこだわりがあるらしい。

だったら学校で素性を知らせてまで、自分などに関わる必要などなかったと思うのだが。

正直、彼女が何を考えているのか分からない。今だってそうだ。

「それで、何か聞きたいことがあったんじゃないの？」

「ああ……ええと、場所もそうですけど、やけに詳しいじゃないですか、そのパーティとやらのこと。どこでそんな情報仕入れたんですか？」

「何だ、そんなのか」

彼女は事も無げに言うと、ついつと右手を差し出し、自らのアイテム・インベントリから立体電子書類状のアイテムをロードする。ホロ・ペーパー薄水色の半透明のその書類には、『召集状』という題名が書かれていた。

「召集状？」

「そう。騎士団員のランカーのみに配られたものでね。今度、久しぶりに女皇直々に出陣するらしい。その前に閲兵式みたいなのをやって、士気高揚しようって魂胆なんだな。ま、他のアライアンスに自分たちの力を見せつけるって意味も、当然あるんだが」

「出陣……『領土戦』ですか？」
コンクエスト

『領土戦』^{コンクエスト} というのは、文字通りアライアンスが『戦域』^{エリア}の支配権を奪い合うシステムを指す。

各戦域にはそれを統治する『城』^{キャッスル}が存在し、イケブクロ・エリアならばサンシャイン60、シンジユク・エリアなら都庁というように、現実^{リアル}においてエリアを象徴する建造物があるところに『城』は配置されている。その『城』を巡って、アライアンスは鎬を削るといふわけだ。

『城』を手に入れたアライアンスは、獲得した『戦域』^{ホーム・ポイント}を本拠地としているプレイヤーから各種租税の徴収のほか、『城』持ち専用の一時的な能力ブースト・スキルの使用や、所属アバター上限数の拡大など、様々な特典を得ることが出来る。血眼になってまで『城』を求めただけの理由は、確かにあると言えた。

そしてトーキョー・スフィアに存在する二十三の『城』をいよや二十三の『戦域』のうち、四つを支配しているのが『白銀騎士団』なのだ。

四つの『戦域』を支配しているアライアンスは、騎士団のほかに二つ。しかし新規の『戦域』獲得に今もとも近いという意味で、騎士団はほかのアライアンスよりも頭一つ分ほど抜けていると言えた。

そんな状況であるならば、もう一押しして『戦域』を獲得するため、『領土戦』へアライアンスの頭首^{リーダー}自らが出陣するというのも、あり得ない話ではない。

「いや、それが『領土戦』じゃないんだよね。というか、大規模共同戦闘^{コ・オペレーション}ですらない。ただのプレイヤー主催の大会なんだ、ちよつとばかり賞品が特殊なだけのね」

「そんなのあり得ないですよ！ どうして頭首がそんな、ただリスクだけを抱えるような真似を？」

「さっきも言っただろ。自分が負けるわけないと思ってるのさ」

頭首権限を持つアバターは、アライアンスや『戦域』から受ける能力ブーストなどの恩恵と引き替えに、ある弱点を抱えることになる。あるいは責任と言い換えてもいい。

それは自分が敗北したとき、頭首は自分が本拠地と設定していた『戦域』を失ってしまう、ということだ。

たとえばイケブクロとシンジユク、二つの『戦域』を支配しているアライアンスがあったとして、本拠地がイケブクロに設定されているとする。この状態の頭首がイケブクロで敗北した場合はイケブクロを、シンジユクの攻城戦で敗北したら、イケブクロとシンジユク、二つの『戦域』を失ってしまうのだ。

このようなりスクの中で『城』を取り『戦域』を支配する、ということは並大抵の努力でできることではない。所属アバター数では全アライアンス中最大を誇る『白銀騎士団』ですら、二十三箇所中四つしか支配できていないというところからもそれが分かる。

『戦域』の支配者が変わることなどしょっちゅう。それどころか、暫定支配者すら決まっていない『戦域』も多々ある。ジェット・バレルの本拠地であるイケブクロ・エリアもそうだ。

そう。あたかも戦国時代のごとく、『領土戦』は熱く激しく燃え上がっていた。

「そう、そんな状況で頭首がフラフラ対戦にでかけるとか、バカにしてんのかって思うよ。いや、してるのさ。きっと……自分以外の全てのプレイヤーのことを」

「そういうものですかね？」

「それは……あつと。そろそろ着くはずだよ、女皇の話はこれで終わりだ。騎士団員が増えてくる、女皇批判は連中にはタブーだからね」

目的地の入り口が見えてきたことで、ストレーガの語気が鋭くなつた。

大広間と彼女が呼んだホールは、正直言って広間という言葉が似つかわしくないほど巨大なものだった。大きさでいえば野球場ほど、それもただの野球場ではなく、東京ドームとかそういった規模のものに匹敵するサイズだ。反対側が霞んで見える。

その先の入り口らしきところに、物々しい藍色の戦闘用重甲冑デュエリング・アーマーと身の丈の二倍もある長槍ランスで武装した、一人のペルソナアバターが立っていた。

「検問らしきものがありますね。騎士が詰めてる」

「なに、この召集状があれば、問題はないよ。自動改札みたいなもんさ」

「そういやそれ、どうやって手に入れたんです？」

「蛇の道は蛇だよ、ジェット・バレル」

まっとうな手段でないということだけは分かった。

（大丈夫なのか、本当に？）

そんな陸朗の不安を煽るように、検問に立っていた騎士団員が二人を呼び止める。

「止まれ」

事務的な言葉だった。

ランカーだけでも数十人、そのパートナーとして来ているものも含めれば、女皇の召集状によって呼ばれたアバターの数は百を越えるだろう。いちいち何らかの情緒的反応を返してなど、到底いられなくて当然だ。

「召集状を見せろ」

「これでいいかい？」

マントの隙間から手を伸ばし、召集状の立体電子書類を騎士団員に見せるストレーガ。

「五番隊所属、『ブラッド・ハウンド鮮血獵犬』か？」

「いかにも。おつとめご苦労さん」

「そっちは？」

「僕のデュエル・パートナー、『ディープ・グレイ暗き深淵』だよ」

「知らん顔だな。他アライアンスの人間か？ ならば、たとえパートナーであっても入れるわけにはいかないが」

「フリーだったけど、入団希望っていうからスカウトしたんだ。登録が間に合わなかったただけでね、人物は保証するさ」

「ほっ……」

胡乱な目付きで、じろじろと無遠慮にジェット・バレルを眺め回す。

ディープ・グレイという存在に不審点を感じたのだろう。当然だ、本当にいるのか、今でつち上げたのかは知らないが、少なくともジェット・バレルはディープ・グレイではないのだから。

しかしここは『ディープ・グレイ』らしく振る舞わなければならぬだろう……どうやって？

視線でストレーガに助けを求めるが、彼女はわずかに頷くだけで、具体的に何かの指示を与えてはくれなかった。

もはやハツタリで切り抜けるしかない。

「ディープ・グレイですッ！ ブラッド・ハウンドさんの下で、勉強させてもらってますッ！！」

「……」

青い騎士は答えなかった。身じろぎ一つせず、じつとジェット・バレルを見つめ続けている。器を見定めているようにも思えた。

ジェット・バレルは高機動射撃型という戦闘特性上、あの『山羊^{ホーン}角』の角のようなドレスアップパーツをほとんど装備しない、ネイキッド・スタイルのアバターだ。そのつるりとしたシンプルな外観は特徴がなく、同じ戦闘特性を持ったアバターと似たり寄ったりだ。相当見慣れた相手でなければ、個体識別は難しい。要するに、誰が誰だかなど分かりっこないのだ。

彼がディープ・グレイ氏（仮）の存在を確信していない限り、嘘を見破られる可能性はほとんどないはずだった。

「もういいかい？ 遅刻しちゃうよ」

しめしめ上手くいったぞ、馬鹿め間抜けめ益暗め、そんな思いつく限りの卑劣な言葉を押し隠したまま、ストレーガは青い騎士の横を通り抜けようとした。

「……待て」

「まだ何か？」

「ブラッド・ハウンド、一つ聞きたい。貴様、『仕事』はどうした？」

「……まだ途中だよ。スピット・ダンプは制圧中だ」

聞き覚えのある単語に、ジェット・バレルの動きが止まる。

何か、とてつもなく嫌な予感がした。こういう時の勘は、外れた試しがない。

即座にアイテム・インベントリにアクセスして、いつでも武器が取り出せるように準備する。用心のため いや、そうではない。それはもう、確信に近かった。

「手こずっているのか？」

「まさか。一番手強い奴は落としたからね。後は雑魚ばかりさ、時間ばかりかかると」

「そうか……」

青い騎士はそう言うと、二、三歩後ろへと下がった。手にした槍がゆっくりと降りてきて、腰の辺りに構えられる。

「つまり……落としたから、連れて来たのか？ その男を……『黒^{ジエ}い銃身^{ツト・パレル}』を！」

「ッー!!」

ぶうん、と風が巻き、長槍が空を裂く。だが一瞬それよりも早く、ストレーガはその身を宙へと躍らせていた。

「ジエツト、下がって援護！」

「分かっていますよッ！」

言われるまでもない。不穏な気配はやはり外れなかった。何が自動改札だ、いきなりルビコン河になってるじゃないか！ 聞きたい疑問と言いたい文句は山ほどあったし今でも増えているが、今はそれどころではない。

騙そうとした不埒者二人に怒りを燃やす受け付け騎士は見るからに重装甲のインファイター。あんなのと真つ向勝負など、死んでもごめんだ。

即座にインベントリからP-90に似た二丁のアサルト・ライフルをロード。弾をバラ巻きながら、後ろに跳んで大きく距離を取る。頑健な青い騎士の装甲は、威力の低い減装弾などやすやすと弾いてしまうが、今はそれでいい。相手を一瞬でも足止めできるなら、彼の役目はそれで十分だ。

「ちい！ ジェット・バレルと……そっちの貴様！ 何者だ！？」
「狼藉者ってところかな！ 悪いが、ここは通してもらおうよ！！」

空中でマントを脱ぎ捨てるストレーガ。

彼女はやる気だ。その両手にはもう、二振りの剣が握られていた。

2 - 3 検問（後書き）

だいぶ世界観についての説明が多いです。

そして相変わらず性格が悪くて血の気の多い魔女であったW

ちなみに『ペルソナクライム』というVRゲーム、内容としてはFPS（視点）+RTS（世界構造）+RPG（成長要素）+武器格闘ゲーム（アクション）という感じのシステムになってます。

総合体験型アプリケーションとか、そんな雰囲気という言葉にまとめられるかな。

2 - 4 野良犬

「オペラピンクの戦闘礼装！^{ドレス・アーマー} 輝く黄金色の放熱索！^{フラチナ・フロンド} 貴様……キ
サマ、『剣の魔女』^{ストレーガ} か！」

マントを脱ぎ捨てたストレーガの姿を見て、青い騎士が驚愕めいた声を上げる。

当然だろう。伝説の存在だ、それが眼前に現れれば歴戦の勇士であつても動揺はやむなし というわけではないようだった。

「おっと、僕をご存じで？」

「知らぬはずがあるか！ 我らが女皇の仇敵ならば、我らの仇敵よ
！！」

「およ、その程度の認識なの？ なるほど、つてことは……」
「何をゴチャゴチャと……さえずるな、魔女！ 女皇に成り代わり、
ここで成敗してくれる！」

青い騎士の長槍が唸りを上げる。蛇体のごとくしなり、いまだ宙にあるストレーガを打ち据えようと襲いかかった。

素早い動きをしにくい空中、^{ファースト・アタック}初太刀はもらったと、青い騎士も確信していたことだろう。なるほど、道理だ。ジェット・バレルであるならば、あの一撃を避けようもない。

だが彼女は『剣の魔女』^{ストレーガ}。十万戦無敗と謳われる、もっとも最強に近いペルソナアバターだ。^{タイムマン}そんな彼女ともあろう者が、どのような体勢だろうと一対一で遅れを取ろうはずがない。

両手に構えたやや細身の剣を、槍の穂先にかち合わせる。一ミリの狂いもなく、鋭く尖った先端同士をぶつけたのだ。

ビィィンと、金属が軋む耳障りな音が響く。それが耳に届いたとき、彼女はすでに次の行動へと動き出していた。

一瞬、ストレーガの全身が発光したように白く輝く。全身に装備したスラスターを、瞬間的に吹かした。精妙にコントローラされるスラスターが生み出した推力は、空中にある彼女に爆発的な加速を与え、その身を一条の閃光と為す。

「懐がから空きだよ。ざっくりいかせてもらう！」

「その程度の打ち込み、装甲で弾いてくれる！」

「できるかな？」

「なめるな！ この戦闘用重甲冑、生半可な攻撃を通しはせん！！」

「ああ、そうかい。だったら試して……みようじゃないか！」

ストレーガは身体ごとぶつかるようにして、双剣を青い騎士の胸元へと突き立てる。

甲高い金属音と共に表面を切っ先が引っ掻き、火花がパツと輝いた。

「言っただろう！ 無駄だ！」

「確かに刺さらない。けど無駄かどうかは……僕が決める！ 生意気言っただんなよ、このバケツ頭が！」

「ば、バケツ頭！？」

確かに青い騎士の鎧は、ストレーガの打ち込みをその表面で弾き、受け流していた。だが彼女の顔には、いささかの動揺さえも浮かんでいない。これでよいと、その目が言っていた。

「装甲の一番厚い部分で受け止める。確かにディフェンスの基本中の基本だ。ならばこっちも基本中の基本、装甲の弱いところを狙うまで！」

「ぬっつー！」

装甲表面に剣を滑らせ、装甲の弱い部分 すなわち可動する関節部分へ切っ先を向ける。狙いは肩口、脇の下。前後上下と複雑な可動を行うその関節は、ストレーガにとっては剥き出しの弱点も同じことだ。

「もらった！」

「ぬっ！！」

だが、青い騎士もまたランカー。騎士団の屋台骨を支える強者の一人だ。即座にストレーガの双剣が避けられないことを察すると、一つの躊躇もなく身体を捻る。くれてやる、そう言わんばかりに、左肩を大きく突き出した。

双剣の刃が青い騎士の肩に食い込む。『剣の魔女』の卓越した殺法は、アバターの関節をまるでバターののようにやすやすと切断していた。

「ぐうっ！！」

「ちっ……！！」

うめき声と舌打ち。

無論前者が青い騎士、後者がストレーガだ。

彼女にしては珍しく、いらついた雰囲気をもとっていた。青い騎士の文字通りの捨て身、腕一本を犠牲にする防御のせいで、一太刀で仕留め損ねたからだろう。

「一合で終わらせるつもりだったが……案外、やる」

「なめるなと言ったはずだ！」

痛みを堪えているのがありありと分かる、だがその言葉はまだ闘争心を失ってはいなかった。

『感覚変換』によるダイレクト・フィードバックは、プレイヤーの体感で自在に動かせることを実現しているが、同時にアバターの受けたダメージを『痛み』として伝えてしまう。

純粹に受けたダメージを全て伝えていてはまともに動くことすらできないので、その機能にはレベルとリミッターがかけられているが、多くのトッププレイヤーはリミッターギリギリまでダイレクト・フィードバックのレベルを上げ、反応速度を鋭敏にチューニングしているのが常だ。

この青い騎士も例外ではなかった。現実^{リアル}で腕一本を失うに等しい痛みが、今彼を襲っていることだろう。それをかみ殺し、なお仇敵に立ち向かおうとする彼の姿には、鬼気迫るものがあつた。

「じゃあっ!」

片腕一本で長槍を操り、鋭い連続突きを繰り出す。巨軀だが、その速度は軽量級にも劣らない。

しかし相手はストレーガ、一対一では負けなしの鬼神である。しかもその戦闘力は、超絶的な機動性能に由来するものだ。こと速さで比べたならば、遅れを取る理由は何一つとして存在しなかった。

「ぬるい……精進が足らんね。まったく、あいつは何を教えるんだ、キミたちに?」

「聞いた風な口をつ! 思い上がるな、魔女!」

「大した忠誠心だね。だが思い上がってるのはキミのほうだぜ?

その隻腕で僕と渡り合おうなぎ、十三年ほど早いんじゃないかな」
「貴様^{役立たず}がその男をかばっていることに比べれば、片腕などちよつどいいハンデだ!」

「……」

一瞬、ストレーガの目が危険な色を帯びて煌めいた。その両腕が

目にも止まらぬ速さで動き、猛烈な突風 剣を振るったときに起こる『刃風』が、青い騎士の身体を弾き飛ばす。転倒こそまぬがれたものの、大きく体勢を崩す青い騎士。

「こっ……これはっ!？」

「ハンデが……どうしたって？」

確かに青い騎士の装甲は硬い。ブルー・メタルに輝く装甲は、ストレーガが操る細身の双剣を防ぎきり、一寸たりとて斬り込ませない。過日にジェット・バレルとの戦いで用いた豪剣を使えば良さそうなものだが、彼女はあえてそれをしなかった。

何故ならば。

「硬い装甲も考えものだね。時にはこうして命取りになる！」

「ぐはっ! おぐっ! うおっ!」

ストレーガはあろうことか、装甲を斬らず、その衝撃のみを装甲の奥にあるフレームに叩きこんでいた。斬らぬ斬撃 矛盾を体現したその攻撃には、装甲厚などまさしく無意味。どれほど強靱な装甲であろうと、厚みを突き抜けて内部にダメージが炸裂するのだ。卓越した技量と、華奢な見た目からは想像もつかないほどの膂力、圧倒的なまでの剣速。ストレーガが備えるその三つが合わさってこそ実現される妙技だった。

堂々たる体躯に相応しいだけの耐久力タフネスが青い騎士を支えてはいたが、それも時間の問題。やがて足がもつれて、ぐらりと身体が傾く。それを見逃すようなストレーガではなかった。

「はあっ!」

「ぐおっ!」

そのまま懐へと潜り込み、剣の柄でアップー気味に殴りつける。顎を打ち据えられ、今度こそもんどり打って青い巨体が崩れ落ちた。ストレーガと青い騎士には、二回り以上の体格差がある。大人と子供、そういうレベルだ。その差を覆す、圧倒的なまでの戦闘能力。それこそが魔女の真骨頂。

「う、うぐっ！」

「すぐさま立ち上がる、その意気や良し。けど、彼のことをハンデ呼ばわりは許せないんだよね。その醜態で、そんな台詞は吐かせない」

「な、何だと？ 貴様ならともかく、あんな下層の弱小アバターに、騎士団の一員たるこの私が劣るとでも……」

「ふん。じゃあ、その身で知ってもらおうじゃないか。ジェット！」

彼女は双剣をアイテム・インベントリに収めると、戦いを見守っていたジェット・バレルの名を呼んだ。

「な、何です？」

「後は任せた。キミが仕留めろ」

「は、はいいつ！？」

いきなり何を言い出すのだこのヒトは？ と、陸朗の頭の中がクエスチョン・マークで埋め尽くされる。台詞と声は聞こえても、言葉の意味が理解できなかった。

あの青い騎士に喧嘩を売ったのは彼女だ。正体がバレなければ大人しくしているつもりだったと言っていたが、こうなった今はその言葉も怪しく思える。ましてやどうして自分が彼女の尻ぬぐいをせねばならないのか。

「ちょ、ちょっと待ってくださいよ！ 何で俺が……」

「あんなに見くびられて、悔しくないのかキミは!？」
「いや……事実ですし、あの人の言ってること」

陸朗自身はハンデ扱いに異論はなかった。ストレীগに一蹴される程度の力しかない自分など、足手まとい以外の何者でもない。どれほど自分に甘く点を付けようと、数合なりともストレীগと打ち合えるランカーに勝ち目などないと思っていた。

むしろ感心していたくらいだ。さすがは上位ランカーだ、すげえなあとか、まさしく他人事に思いながら。

「はあ……キミにはやっぱり覇気が足りないなあ。ちょうどいい機会だよ、これは」

「何がちょうどいいのかさっぱり分からないんすけど」

「キミが自分の身の程を知るのにちょうどいいってこと。ほら、行った行った!」

「わわっ!？」

ドン、と背中を押されて、青い騎士の前に転がり出てるジェット・バレル。

ジェット・バレルは決して小柄なペルソナアバターではないが、その彼よりも頭一つ分ほど大きい敵アバターが、彼のことをじろりと見下ろしている。

「……正気か？」

「悪いけど、それはあの人魔女に聞いてくれ」

ぎぎぎつと、軋むような音を立てて、青い騎士の頭がストレীগへと向いた。

彼女は腕組みして壁に寄りかかるといって、完全な傍観者スタイルだ。きつと、あの仮面の下ではいつも通り、美しくも悪辣な笑みを

浮かべているに違いない。

「なんだい、青いの？ ジェットを倒すのは、そもそもキミたち騎士団の目的だったんだろ？ おあつらえ向きじゃないか、彼を倒せたらその首、キミたちにくれてやるよ」

「……『ブルー・グラード蒼の氷壁』だ」

ジェット・バレル本人を無視して、話がどんどん進んでいる。――
ミリも彼の意志を反映する気はないらしい。

「青いの、仕切り直しにするよ。まずはダメージを修復するといい。ジェットに手は出させないから」

「ちよっ！ まっ！」

「……後悔するなよ」

ばちつと音を立てながら、青い騎士改めブルー・グラードの足下で光が弾けた。円状の幾何学的紋様　たとえるなら魔法陣のような　が展開され、そこから立ち上る光の帯が、ブルー・グラードの全身を包み込むと、斬り落とされた腕を初めとして、彼の受けていたダメージがみるみるうちに回復されていく。

対戦終了することでアバターの状態がリセットされるニュートラル・フィールドと異なり、アンリミテッド・フィールドでは、ログインしている間に受けたダメージを回復する手段は限られている。

一つは時間による自動回復。何もせず、その場にとどまっていれば十五分ほどでダメージは全回復する仕様だ。しかし移動していたり、ましてや戦闘を行っている場合は当然回復はストップ。いつ襲われるか分からないアンリミテッド・フィールドで、そんな悠長ことはやっていられない。

そこで登場するのが『リカバー・コード』と呼ばれる回復用アイテムだ。『ペルソナクライン』内の通貨である『クレジット』で購

入することができるそれを、一個や二個は常に持ち歩くのは、どんなプレイヤーでも常識のレベルだ。当然、ブルー・グラードも二、三度全回復できる程度には所有していた。

「災難だな、ジェット・バレル。あのような魔女に目を付けられて」

調子を確かめるように、再生した腕をぐるりと回すブルー・グラード。ストレーガの打ち込みで受けたダメージも、すでに回復しているようだ。

「同情されてもなあ……やることはやるんだろ、あんた？」

「無論。貴様らスピット・ダンプの住民を駆逐するのは、女皇の決定事項だ」

現在暫定支配者の存在しないイケブクロ・エリアにおいて、最大の戦闘力を持っている集団は、ジェット・バレルらスピット・ダンプの住人だ。無論アライアンスに比べれば団結力などないに等しい有象無象に違いはないが、こと共通の『敵』が出てくれば話は別。拙いながらも手を組んで、アライアンスの侵攻を撃退したことは一度や二度ではない。

エリア制圧を狙うアライアンスから見れば、頭の痛い存在だった。

「……俺たちを駆逐してどうする？」

「言うまでもない。イケブクロを獲る……！ ブラッド・ハウンドは、そのための尖兵だった。もつとも、どうやら報告すらできないほどの敗北……『活動臨界』^{リミット・バースト}に追い込まれたようだがな」

じろりと睨んだ先にいるのはもちろんストレーガだ。かつて招集状の入手方法を尋ねたときに『蛇の道は蛇』と言ったのはつまり、哀れな『鮮血獵犬』をぶちのめして奪い取ったということなのだろう。

う。

おまけに『活動臨界』^{リミット・バースト} 一度に強烈なダメージを与えることで『ペルソナクライン』から強制ログアウトさせる行為のこと。急激な『感覚変換』解除によって神経系に付加がかかる怖れがわずかながらあるため、再ログインするためには一定期間の経過と簡易的なメデイカルチェックが必要になる 相手に相手を追い込んでいるのだから、その攻撃の苛烈さたるや推して知るべしだ。えげつない。

「同じ騎士団とはいえ直接の面識はなかったが、その無念察するに余りある。せめて奴の任務を私が果たすことで、その慰めとしよう」
「地上げ屋め。そんなにイケブクロが欲しいのか」

「当然だろう。戦域拡大は全てのアライアンスの悲願だ。貴様や魔女のような野良犬には分かん話だろうがな」

「野良犬、ね」

ランカーが実力の劣る者を見下すのは納得できる。それは強さの裏打ちがあるからだ。上下がランクという数字ではつきりと表れている以上、反論は負け犬の遠吠えに過ぎない。

ましてや、ジェット・バレルには己が汚い方法に手を染めている負い目がある。どれだけ見下されても、その事実に関しては弁解の余地など一片もない。

だが。

「あんたらみたいに徒党を組まないことを、ごちゃごちゃ言われる筋合いはねえんだよな……！」

思考内デスクトップから、アイテム・インベントリにアクセス。

実体化したのは、愛用のロング・ライフルよりもさらに大型の火砲。攻城戦などで用いられる、大口徑破碎榴弾砲『ストライク・ワゴン』だった。

「おっ……」

黙って会話を聞いていたストレীগが、小さく声を上げた。ジエツト・バレルのやる気を感じたのだろう。

「そんな武器、持ってたんだ。いいチョイスだよ。でも……」

「分かってる。そうそう当たるもんじゃない、こういうのはな」

「ふふ、分かっているならいいさ。上手くやんなよ」

その声はどこか楽しげだ。傍観者ですらない、ただの『観客』だ。手など一切出さない、魔女は暗にそう言っているようだ。

だが、それに異など唱えようはずもない。いや、手など出させない。陸朗にだってプライドはあるのだ。踏みつけられても、蔑まれても黙り続ける案山子ではない。

ブルー・グラードは彼を野良犬と呼んだ。しかし、野良犬は野良犬でも彼は飼い犬崩れではなく、鋭い牙も爪もある『野生の猛犬』オオカミだった。

2 - 4 野良犬（後書き）

魔女は設定上強すぎるので、バトルはどうしても一方的になってしまっなあ。

五分で戦える奴を早く出さないと……。

あとオオカミってルビは無茶があると思う、我ながらw

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9585u/>

仮面の魔女と黒い銃

2011年10月13日02時49分発行